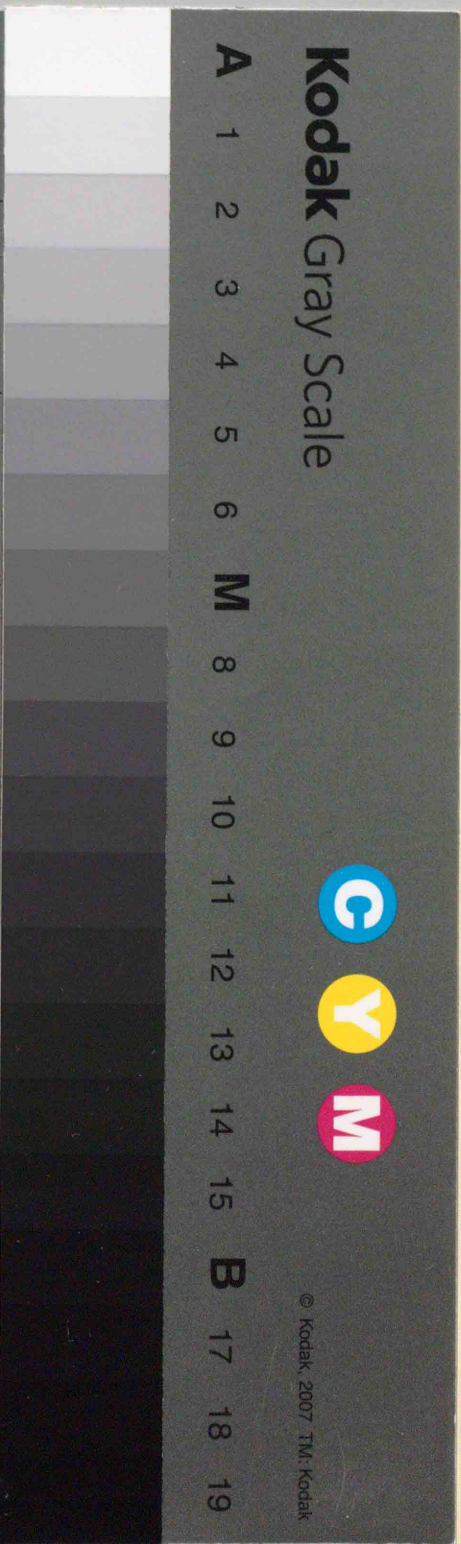
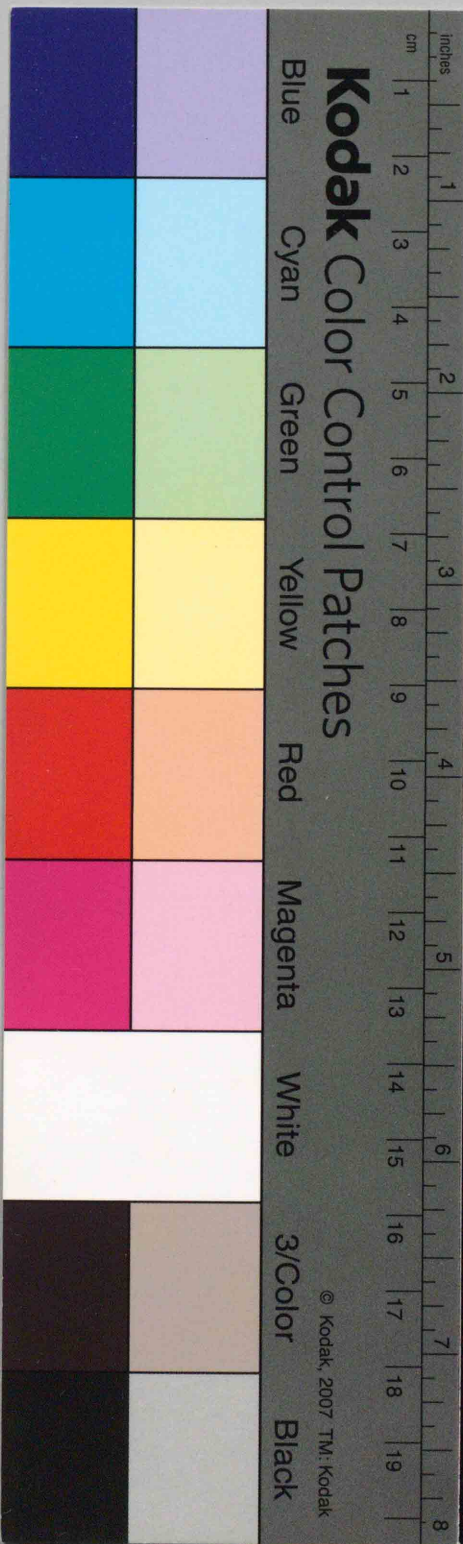
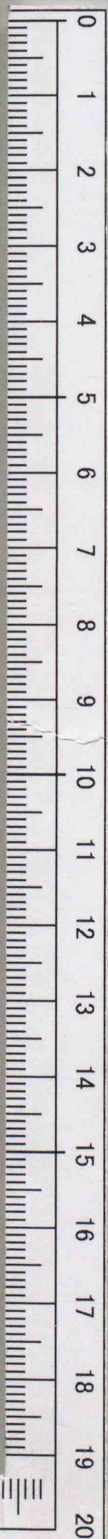


訂改
帝國讀本

卷七

3759
Ha7
資料室



41717

教科書文庫

4
810
41-1918
200030 2054



大正七年十二月十六日
文部省檢定濟

文學博士芳賀矢一編

改訂
帝國讀本



東京
合資
會社
富山房發兌



改訂
帝國讀本卷七目次

一	日本文學 其の一(口語文).....	一
二	日本文學 其の二(口語文).....	四
三	花のさだめ.....	八
四	四季.....	二二
五	晩春の別離(韻文).....	二五
六	平家雜感.....	二九
	一 都落.....	
	二 清盛入道.....	
七	扇の的.....	三六

目次

八 壇の浦 其の一……………三四

九 壇の浦 其の二……………三七

一〇 春夏の句(韻文)……………四三

一一 川 柳(口語文)……………四五

一二 カーライル博物館 其の一(口語文)……………五〇

一三 カーライル博物館 其の二(口語文)……………五九

一四 尺牘二則(書簡文)……………六四

一 立志……………

二 弟に與へて天理を諭す……………

一五 芳流閣上の血戦……………七一

一六 故郷 其の一……………七九

一七 故郷 其の二……………八三

一八 羈旅の歌(韻文)……………九〇

一九 熱帯の海 其の一(口語文)……………九三

二〇 熱帯の海 其の二(口語文)……………九七

二一 歌人西行 其の一……………一〇〇

二二 歌人西行 其の二……………一〇四

二三 醒睡笑……………一〇九

二四 泰山に登る(口語文)……………一一三

二五 槩を横たへて詩を賦す……………一二二

二六 西郷隆盛論……………一二五

自 讀 文……………

一 我が國の童話……………一三三

二 新葉集の歌……………三三

三 世界的水路としての瀬戸内海（口語文）……………三六

四 棧の記……………四一

五 労働雜詠（韻文）……………四九

卷七目次終

改訂帝國讀本卷七

一 日本文學 其の一

優美閑雅な日本語を使つて、平和柔順な國民が歌つた歌、それには長歌も短歌もあるが、此等の歌が日本文學の基礎といつてよろしい。四圍の美しい自然を歌つて、人事もすべて自然の譬喩に寄せられて居ることが、早く後世の文學の特質を示して居る。古事記、日本紀の歌、萬葉集の歌等は即ち其等の國民歌の幾分かを傳へたもので、推古以來支那の文明が傳はつて、段々と漢文漢詩が用ひられるやうになつて

國民歌



(一) 聖武孝謙兩朝に仕へて中納言持節征東將軍に至る萬葉集の選者として傳へらる。延暦四年(一四四五)暮。

勅撰和歌集

も、日本固有の歌は、それとは別途に發達した。殊に上代からの神祇を祭る詞、祝詞の形式を應用して、寧ろ漢詩に對抗して、特殊の國民思想を歌つたのが、柿本人麿、山部赤人等の先輩歌人で、續いて奈良時代の大伴家持等である。萬葉集には漢文渡來以前の歌も多く載せてあるが、かういふ新進歌人等の歌も多い。優美典雅といふ點に於て、忠君愛國の思想に於て、よく日本國民の上代思想をあらはしたものである。

奈良時代に出來た萬葉集は漢字を以て記された。漢字の音訓を用ひて、日本語を記したのである。平安朝になつて百餘年の間に、假名の發達があつて、平假名で自由自在に國語を記すことになつた。是に於て、假名文の發達が著しくなつた。萬葉集の後をついで、古今集以下の勅撰和歌集が出來た。

(一) 藤原宣孝の妻。一條天皇の中宮上東門院に仕ふ。

(二) 歌人清原元輔の女。一條天皇の皇后定子に仕ふ。

文藻

抒情詩
叙事詩

のみでなく、竹取物語、伊勢物語を物語の祖として、數多の假名物語、日記、隨筆の類があらはれた。就中有名なのは紫式部の源氏物語と、清少納言の枕草子で、漢學の素養が其の文藻を助けたことは、見逃されぬ事であるが、上古以來行はれた和歌の風流が、常に此等の文學の背景となり、基礎となつて居るのは、争はれぬ事實である。大鏡や、榮華物語などいふ史實を記した物語も、つまりは其の材料を一轉化したのである。奈良時代の和歌即ち抒情詩が、平安時代には物語、即ち叙事詩と發達したのである。

鎌倉幕府の創立と共に、時代は一變した。隨つて文學も一變した。源平二氏の争が材料に採られた保元物語や、平治物語や、平家物語や、源平盛衰記などといふ軍記物語が、佛家の

諸行無常
愛別離苦

諸行無常、愛別離苦の思想の下に筆述せられた。降つて吉野朝廷の頃の太平記も、同じく軍記物語である。平安時代の盛時とは其の材料に於てこそ、それ〴〵差別はあれ、叙事詩たる事は同様である。材料の變化と共に、言語も變化して、漢語及び漢文脈の加つて來たことは、自ら其の内容と外形との調和を保たしめて居る。徒然草、方丈記なども、佛教の深い感化から生れた此の時代の著名な産物として數へられる。

二 日本文學 其の二

足利將軍の世は、概して戰亂時代で、無學の世と稱せられて居るが、明朝との交通も繁く、繪畫をはじめ美術工藝の進歩も著しく、鎌倉の末からの進歩を受けて、將軍義滿(一)の頃に

(一) 足利將軍。應永十五年(二〇六八)年五月十一日薨。

劇詩

至つて、能の發達大成を見るに至つたのは、大いに注意すべき事である。平安、鎌倉二時代を通じての叙事詩は、此に至つて劇詩の形をなしたのである。能は其の後徳川時代を通じて衰へず、今日に傳はつて尙盛であるのを見て、如何に我が國民の嗜好に投じたものであるかが分る。其の材料としては、上代の萬葉集から、中古の古今集、伊勢物語、源氏物語等は勿論、平家物語、源平盛衰記、又義經記、曾我物語などの軍記物語に及んで居り、又世話材料も入れてある。歌ふ方から言つても、音樂の方から言つても、舞の方から言つても、出來るだけ當時の粹を抜いたもので、むしろ其の精華を集めたものと言つてもよい。あらゆる美術の方面を集大成したものであるとして、當時の武士の修養に資したことは多大であつた。

世話材料

集大成

翻刻

徳川時代に至つては、學問の復興から、漢學が更に唐宋時代の精華を學んだのは勿論、儒學に於ては、支那に於ても稀な程な大儒が輩出した。又國學の研究も盛になつて、久しく忘れられて居た平安時代以前に遡つて、萬葉集も研究せられ、源氏物語も研究せられた。印刷の方法が進んで、古書の翻刻が盛になつて、庶民皆太平の世を樂しんで、靜に文學を翫味するの餘裕を得た。漢學國學の勃興につれて、専ら平民社會に行はれた所謂俗文學が發達した。淨瑠璃や、小説や、俳句や、狂歌や、川柳やが和漢古今の文學に根ざして、新しい國民思想の花を咲かせた。昌平時代の樂天洒落な氣風と、義理人情に勇み立つ犠牲的精神とが、此等の各種の文學の上に溢れて居る。綱吉將軍の元祿時代と、家齊將軍の文化文政時代

樂天洒落

俗文學

(一)徳川第五代將軍
(二)徳川第十一代將軍

(一)本名杉森信盛。長門の人。享保九年(一七二四)歿。
(二)本名瀧澤。江戶の人。嘉永元年(一八二五)歿。
(三)永元(一八二八)歿。

とが、其の最大繁盛な時世であつた。淨瑠璃の近松門左衛門、俳句の芭蕉は元祿の世に屬し、小説の曲亭馬琴は文化文政の世に屬する。其の他の作家は數限りもない。平民社會の嗜好に投じた爲、中には材料思想に鄙陋なもの尠くないのは遺憾である。演劇の發達の著しかつたことも、注意すべき事柄である。かやうに平民文學の發達したのは、一面に於て平民社會の勃興を意味するので、日本の國民が東洋の諸國中、明治大正の御代を待つて大いに世界に活躍するといふ氣運が、已に其の上に示されて居る様に感ぜられる。

維新以後の進歩は、ひたすら西洋文學の新味を加へたことで、東西文明の融和は、我が國文學の上に於ても、いち早く認められるのである。最初は平易な英文の小説、詩歌の翻譯

傾向生命

から始つて、次第に佛、獨、露、瑞諸國の文學を咀嚼するに至り、歐米の新思潮は抒情詩、叙事詩、劇詩の各方面にわたつて、常に新しい傾向生命を我が文學の上に及しつゝあるのである。上古以來の國文學の研究も益盛になつて、一層根柢あり、權威あり、價值ある文學の興るのは近き將來に期待せらるべきことである。但し新奇を競ふの餘り、往々我が國體と相容れず、我が國民性と扞格する思想の輸入せられることもあるので、其の間の調節は大いに考慮しなければならぬのである。

扞格

調節

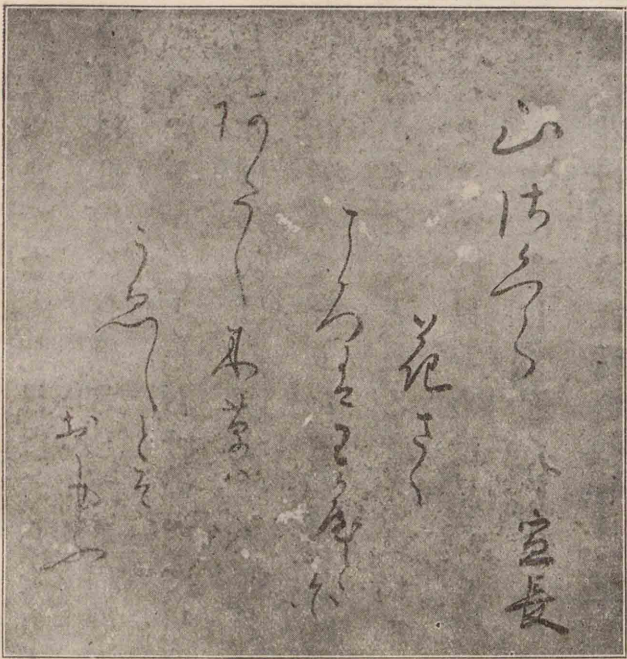
三 花のさだめ

本居宣長

花は櫻、櫻は山櫻の葉赤くてりて細きが、まばらにまじり

こよなくおくる

て花しげく咲きたるは、またたぐふべき物もなく、うき世のものとも思はれず、葉青くて花のまばらなるは、こよなくお



宣長
山ざらく花さくころはわがやどにあだし木草は植ゑじとぞおもふ

色はゆ

りたるこなたに咲けるは、殊に色はえて見ゆ。空清く晴れた

本居宣長
いふ中にも、品々の有りて、細かに見れば、一本毎に、いさゝか變れるところ有りて、またくおなじきは無きやうなり。すべ

(藏氏綱信木々佐) 蹟筆

さらなり

る日、日影のさす方より見たるは、匂こよなくて、同じ花とも
覺えぬまでなん。朝日はさらなり、夕ばえも。

むげに
ねぶ

(一)残りなく散
るぞめでたき
櫻花、在りて
世の中は、ての
うければ。(一)
(古今集、讀人
不知)

梅は紅梅、ひらけさしたる程ぞいとめでたきを、盛になる
まゝに、やうくしらけゆきて、見所なくなるこそいと口惜
しけれ。櫻の咲ける頃までも散ること知らで、むげに匂なく
ねびれ萎みて残りたるを見れば、げに在りて世の中は何事
も皆かくこそと、見る春ごととに思ひ知らるか。白きはすべ
て香こそあれ、見るめは品おくれたり。大かた梅の花は、小さ
き枝を物にさして近く見たるぞ、梢ながらよりはまされる。
桃の花は、あまた咲きつゝきたるを遠く見たるはよし、近く
てはひなびたり。

山吹、燕子花、撫子、萩、薄、女郎花など、とりぐにめでたし。菊

したゝかに

もよき程につくろひたるこそよけれ。餘りうるはしく、した
たかにつくりなしたるは、なかくに品なくなつかしから
ず。躑躅、野山に多く咲きたるは目さむる心地す。海棠といふ
もの、唐めきてこまやかに麗しき花なり。

ことさら
めく
心のなし
僻心

そもくかくいふは、皆おのが思ふ心にこそあれ。人は又
思ふ心異なるべければ、ひとやうに定むべきわざにはあら
ず。又今様の世の人のもてはやすめる花どもも、世に多かる
を數へいでぬは、ことさらめきたるやうなれど、歌にも詠み
たらず、ふるき物にも見えたること無きは、心のなしにや、な
つかしからず覺ゆかし。されどそれはたひとやうなる僻心
にやあらん。

—玉がつま—

(一)春はたゞ花のへに咲くばかり、物のははれは秋ぞまされる。
(拾遺集) 讀人不知

氣色立つ

おぼつかない
きさました

四季

吉田兼好

をりふしのうつりかはるこそ、物毎にあはれなれ。物(一)のあはれは秋こそまされ。と人毎にいふめれど、それもさるものにて、今ひとときは心も浮立つものは、春の景色にこそあめれ。鳥の聲なども殊の外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草萌出づる頃より、やゝ春深く霞み渡りて、花もやう／＼氣色立つ程こそあれ、折しも雨風打續きて、心あわたゞしう散過ぎぬ。青葉になり行くまで、よろづにたゞ心をのみぞ悩ます。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅の匂にぞ、古の事もたちかへり、戀しう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひ捨てがたきこと多し。

(一)陰曆四月八日。
(二)賀茂祭。四月の中、酉の日。

水鶏のたゝ

(三)六月晦日の大祓。

取りあつめたる事

腹ふくるゝ
わざ
かいやり捨
つべきもの

灌佛の頃(一)、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂りゆく程こそ、世のあはれも人の戀しさもまされと人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月、あやめ茸く頃、早苗とる頃、水鶏のたゝくなど、心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月(二)ばらへまたをかし。棚機祭るこそ艶かしけれ。

やう／＼夜寒になる程、雁鳴きて来る頃、萩の下葉色づく程、わさ田刈干すなど、取りあつめたる事は秋のみぞ多かる。又野分のあしたこそをかしけれ。いひつゞくればみな源氏物語、枕草子などに事ふりにたれど、同じ事又今更にいはいにもあらず。おぼしき事いはぬは腹ふくるゝわざなれば、筆に任せつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやり捨つべきも

をさく

のなれば、人の見るべきにもあらず。
 さて冬枯の景色こそ、秋にはをさく、劣るまじけれ。汀の
 草に紅葉の散りとゞまりて、霜いと白う置けるあした、遣水
 より烟の立つこそをかしけれ。
 年の暮れはて、人毎にいそぎあへる頃ぞ、又なくあはれ
 なる。すさまじき物にして見る人もなき月の、寒けく澄める
 二十日餘の空こそ、心細きものなれ。御佛名、荷前(一)の使立つな
 どぞ、あはれにやんごとなき。公事もしげく、春のいそぎに
 取重ねて催し行はるゝさまぞいみじきや。
 追難(二)より四方拜につゞくこそおもしろけれ。晦の夜いた
 う闇きに、松どもともして、夜半過ぐるまで、人の門叩き走り
 ありきて、何事にかあらんことゝしくのゝしりて、足を空

すさまじ

(一)十二月十九日

より二十一日

まで三日間宮

中に行はれし

佛事。

(二)十陵八墓に幣

帛を奉られし

使。

(三)十二月晦日に

行はれし鬼や

らひ。

に惑ふが、曉方よりさすがに音なくなりぬること、年の名残
 も心細けれ。亡き人のくる夜とて、魂祭るわざは、此の頃都に
 は無きを、あづまの方には尙することにてありしこそあは
 れなりしか。かくて明けゆく空のけしき、昨日に變りたりと
 は見えねど、引きかへ珍しき心地ぞする。大路のさま松立て
 わたして、花やかに嬉しげなるこそまたあはれなれ。

—徒然草—

五 晩春の別離

島崎藤村

時は暮行く春よりぞ、また短きはなかるらん。
 恨は友のわかれより、更に長きはなかるらん。
 君を送りて花ちかき、高樓たかどのまでも來て見れば、

佐保姫の春の車

緑にまよふ鶯は 霞空しく鳴きかへり、
 白き光は佐保姫の 春の車を照すかな。
 これより君は行く雲と 共に都を立出でて、
 懐へば琵琶の湖の 岸の光に迷ふとき、
 東膽吹の山高く、 西には比叡、比良の峰、
 日は行通ふ山々の 深きながめを伏仰ぎ、
 いかにもすぐれし想をか 沈める波に湛ふらん。
 流は空し、法皇の 夢杳なる鴨の水、
 水にうつろふ山城の みやびの都行く春の
 霞める姿見盡して、 畿内に迫る伊賀、伊勢の
 鈴鹿の山の波とほく 海に落つるを望む時、
 いかによろづの恨をば 空行く鶯に窮むらん。

(一)白河法皇。

春去行かば青によし 奈良の都に尋ね入り、
 としつき君が戀慕ふ 御堂のうちを遊ぶ時、
 古き藝術の花の香の 伽藍の壁に遣りなば、
 いかにも韻を身にしめて 深き思に沈むらん。
 さては秋津の島が根の 南の翼紀の國を
 めぐりて進む黒潮の 鳴門に落ちて行く處
 天際とほく白き日の 光を漏す雲裂けて、
 目にはるかなる遠海の 波の躍るを望む時、
 いかにも胸打つ音高く 君が血汐の騒ぐらん。
 又は名に負ふ歌枕、 波に干とせの色映る
 明石の浦の朝ぼらけ、 松萬代の音にひやく
 舞子の濱の夕間暮、 若しそれ海の雲落ちて、

狹霧

淡路の島の影暗く、
千鳥の聲を聞く時は、
遠き昔をしのぶらん。
いかに浦邊にさすらひて

ひめぐと

げに君がため山々は
磯に流るゝ白波を
旅路遙に野邊行かば
森のひめぐと探りもて、
もなかに遊び、大川の
神をもよばひ、谷々の
魂をも遠く返しつゝ、
朽ちせぬ琴を搔鳴せ。
さらば名残は盡きずとも、袂を別つ夕間暮

朽ちせぬ琴

見よ影ふかき欄干に
煙をふくむ藤の花。

北行く雁は大空の
霞に沈み鳴歸り、

彩なす雲も愁へつゝ
君を送るに似たりけり。

あゝ何時か又相逢うて
もとの契をあたゝめん。

梅も櫻も散果てゝ
すでに柳は深緑、

人はあかねど、行く春を
いつまで此處に留むべき。

われに惜しむな、家苞の
一枝の筆の花の色香を。

—藤村詩集—

六 平家雜感

高山林次郎

一 都 落

凡そ世の中に傳へ遺されし歴史は多かれど、平家の都落

ばかり、哀にも、また目覺しきは
無かるべし。

南都(一)の餘燼未だ冷めず、墨股

の勝鬨尙響きぬるに、信越俄に

雲亂れて、木曾の五萬騎はや比

叡のあなたに充滿ちぬ。宇治、淀

の備もろくも潰えて、都も今を

限りとぞ見えし。あはれ一門の

天下身を置くに處なし。世はか

く憂きに、み吉野(四)の山のあなた

に隱家は無きか。いざさらば己

みなん。都の中にていかにもな



平家権日(春)現

(一)治承四年十二月、平重衡の父清盛の命を受けて奈良東大寺興福寺を焼く。
(二)養和元年三月、重衡等源行家を尾張國墨股に討つて大いに之を破る。
(三)養和元年、平氏展義仲に破らる。
(四)壽永二年七月、義仲延暦寺に據る。

(五)み吉野の山のあなたに宿もがな、身のうき時のかくれ家にせん。(古今集、讀人不知)

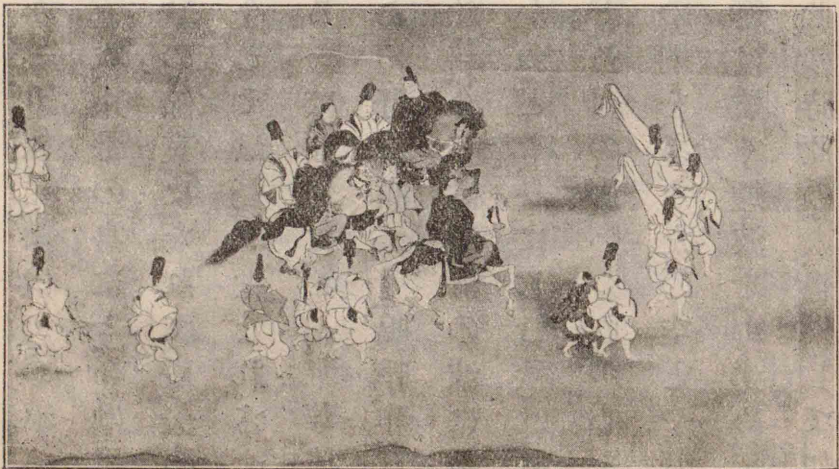
(一)壽永二年七月、義仲を海に走る。西海

一炬の煙と
なす

鳳闕

椒房

らんよりは、西國のみゆきに、一
旦の凌辱を忍ばせ給はんや。生
死も知らぬ別路に、人のあはれ
の限りもなう。復歸り來べき都
としも思はねばにや。六波羅池
殿、西八條以下一門譜第の邸宅、
宿房、京白川の四五萬家を併せ
て、一炬の煙となし果てぬるこ
そ、あわたゞしかりしか。
こゝに鳳闕の礎空しく残り、
椒房の嵐夜々悲しむ。保元此の
かた、天下の榮華を盡したる花



都驗記繪(詞)

(一)「ふるさとを、燒野が原とかへりみて、末は煙の浪路をぞ行く。」平家物語、平盛

翠華搖々

身にしむ秋は欺かれず

(二)平清經。

の都のふるさとを、燒野の原とかへりみて、末は煙の浪路をば、行方も知らずさすらふらん。直衣、束帶の身にも、今は黒金の衣を着けたれども、誰かは詠歎の餘哀になれて、弓矢の響を勵むべき。さても捨難き命や。今こそは憂き世なれ。さすがにしのばるゝ昔の様の、夢に入るをば如何にせん。翠華搖々として西に向へば、秋風到るところ野に満てり。嗚呼、昨日は東關のもとに轡を並べて十萬餘騎、今日は西海の波に纜を解きて七千餘人。行手の空はわかねども、身にしむ秋は欺かれず。渚に寄する波の音、袂にやどる月の影、いづれか心を傷ましめざるべき。月の出づる山の端を、あなたの空とやおぼしけん、日暮舳に笛吹く人あり、響は遠く煙波をかすめて、三軍ひとしく耳をそばだつ。嗚呼、此の時此の人、想果して如何。

二 清盛入道

梭をかふ

(一)平忠度。

(二)平維盛。

世にも哀なるは平家とぞいふめる。げに此の一門の盛衰を考ふるに、心も詞も及び難きなり。案ずれば、一旦の榮華に耽りて、百年の計を思はず。今や秋の嵐の吹荒ばんずる朝も、春の夜の夢なほ朧にして、覺めての後はさすがにうき世と觀ずれども、先世、後代既に梭をかへたるをいかにすべき。今を昔に反さんすべもかた絲のよりくづれたる世こそ、かへすも是非なけれ。されば風雅にかくれては、一題の遺詠に今生の本懐を終へ、恩愛にほだされては、己身の現在に來世の果報をおもはず。哀は桐の一葉に散初めて、世はとこしへの秋とぞ見えにける。おもへば怪しきまでに哀なりける運命かな。

なか／＼に

さるにても入道相國の生涯こそ、なか／＼におもしろかりけれ。

攝籙
成敗

十善の帝王

弓矢のいさをしはや、畢んぬ。朝家の權柄今はた盛なり。一門殿上にのぼりて六十餘人、私封全國にわたりて三十餘州、攝籙の家は名のみにて、四海の成敗みなこゝに集れり。昔は殿上の交をだに嫌はれし人、今は、此の人ならでは人にあらじ。と唱へられ、三百の禿童は路に往反すれども、京師の長吏、これが爲に目をそばだつるばかりなり。されば十善の帝王、かしこくも外戚の威におされ給ひて、八幡、賀茂の御幸は、八重の潮路の巖嶋とぞ觸れられける。なにかしの卿が、入る日をも招きかへさんずる勢。と書かれしも、げにことわりとぞ覺ゆる。

卿相雲客

(一) 治承四年福原遷都

(二) 平安京。當時の落首に「百年を四かへり」まで、にすぎ來

に、し、愛宕の里の荒れやまてなん。(平家物語)

(三) 重盛の子。平家没落の前、後山の上り、高野の時に、終らず。(一八二〇)

不敵なる入道は、私門の榮に飽きたらで、世に人もなげにふるまはれけるこそゆゝしけれ。こゝに卿相、雲客、流離の難に遇ふもの四十餘人、法皇の御身を以てすら、城南の離宮に射山の嵐をしのばせ給ふ。中にも重代(一)の帝座、俄に動きて、愛宕(二)の里の哀をとゞめけるこそ、なか／＼にあさましかりしか。

咲きも残らず散りも初めぬ櫻花、嵐なくともかくてやはやむべき。一朝東關急を傳へて、大將軍權亮少將維盛、赤地の錦の直垂に萌黄匂の鎧着て、連錢蘆毛の馬に金覆輪の鞍置かせたる容儀、帶佩こそ、あつぱれ平門隨一の貴公子と見えしかど、富士川の水禽に算を亂し、十萬餘騎は、徒らに長き世の笑をとゞめたるに過ぎず。加ふるに北土俄に雲亂れて、

木曾の山氣漸く都に逼り、兩山の衆徒また既に反覆の色を示しぬ。平家の運命日に益急なり。

時しも入道は病に罹りぬ。哀れ病の牀の寂しきに、霜夜の

鐘の響の闇の底に沈む時、安藝守の

昔より太政入道の今に至る迄、三十

餘年の過去を靜に憶ひ出でたる時、

しかして命の際の身ぞと觀じたる

時、彼果して如何の感慨をか催しけ

ん。一代の榮華身にあまりて、保平の

いさをまた言ふに足らずと思はざりしか。おのれにつらか

りし人々を、かくまでに惱まし、ことの罪深かりきとは思

はざりしか。幾度か帝座を驚かし奉りしはては、軍兵を擁し



平清盛

恩愛の絆

六慾

欣求

て法皇を幽閉しまゐらせし事の中にも非道の所行なりしを思はざりしか。更に小松の内府が、身命にかへて、乃父の罪業を救はんとせし至孝の情に想ひ到りて、恩愛の絆にうたれた悔恨の心を動かすこと無かりしか。佛門に歸依して入道と呼びなせる身の、今や六慾煩惱の絆を離れんずる大事の際に、今生の名利を棄て、未來の淨樂を欣求する一念を發すること無かりしか。皆あらず。入道は死に至るまで其の初念を翻すことなく、まさに其の生けるが如くにして死せしなり。

今はの詞にいはく、兵衛佐頼朝が首を見ざりつるこそ、かへすがへすも遺憾なれ。われ死したりとて、佛事孝養をもすべからず、堂塔をも建つべからず。いそぎ討手を下し、彼が首

三世の因果
どまれかく
まれ

一我

眇軀

を刎ねて我が墓前に懸けよ。これぞわれに對しての今生、後世の孝養にてはあらんずる。と一念の執着に、必衰の運命をもとのもせず、三世の因果を身にひくとも、なほ怨敵に報いんことを必せり。其の事の可否はしばらく措き、とまれかくまれ、丈夫たる心の強きは感ずべきなり。たとひ四海の波を翻して彼が頭にそゝぐとも、なほ此の一我をいかにともすること能はざらん。六尺の眇軀こゝに至れば天地の大にも比ぶべく、運命われに於て浮塵にひとしからん。いはゆる死してしかして生けるものといふべきか。——橋牛全集——

七 扇の的

さるほどに阿波、讃岐に、平家にそむきて源氏を待ちける

尋常にかざ

五つぎぬ

舟のせがい

矢おもて
けいせい
てだれ

つはものども、あそこの嶺、こゝのほらより、十四五騎、二十騎うち連れうち連れ馳來る程に、判官程なく三百餘騎になり給ひぬ。けふは日暮れぬ、勝負を決すべからずとて、源平互に引退く所に、沖より尋常にかざつたる小舟一艘、汀へ向つて漕寄せ、渚より七八段ばかりにもなりしかば、舟を横さまになす。あれはいかにと見る所に、舟の中より年のよはひ十八九ばかりなる女ばうの、柳の五つぎぬにくれなるの袴着たるが、皆くれなるの扇の日出いたるを、舟のせがいに挟み立て、陸に向ひてぞ招きける。
判官、後藤兵衛實基を召して、あれはいかに。と宣へば、射よとにこそ候らめ。たゞし大將軍の矢おもてにすゝんで、けいせいを御覽ぜられん所を、てだれにねらうて射落せとの謀

小兵

とこそ存じ候へ。さりながら扇をば射させらるべうもや候らん。と申しければ、判官、みかたに射つべき仁は誰かある。と問ひたまへば、てだれども多う候なかに、下野の國の住人那須の太郎資高が子に、與一宗高こそ小兵には候へども、手はきいて候。と申す。判官、證據があるか。さん候。かけ鳥などをあらそうて、三つに二つは必ず射落し候。と申しければ、判官、さらば與一呼べ。とて召されけり。

いろふ

與一其のころは、いまだ二十ばかりの男なり。褌にあかぢの錦をもつて、おほくび、はたそでいるへたる直垂にもよぎ緘の鎧着て、あしじろの太刀を佩き、二十四さいたるきりふの矢負ひ、うすきりふに鷹の羽わり合せてはいたりけるぬだめの鏑をぞさし添へたる。重藤の弓脇にはさみ、甲をば脱

一定

仔細を存す

御錠

いで高紐にかけ、判官の御前にかしこまる。判官、いかに與一。あの扇のまん中射て、かたきに見物せさせよかし。と宣へば、與一、つかまつつとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、永きみかたの御弓矢のきずにて候べし。一定仕らうずる仁に、仰せつけらるべうもや候らん。と申しければ、判官大きに怒つて、今度鎌倉を立つて西國にむかはんずる者どもは、みな義経が下知を背くべからず。それに少しも仔細を存せん人々は、これよりとらへ、鎌倉へかへらるべし。とぞ宣ひける。與一重ねて辭せば、悪しかりなんとや思ひけん。さ候はば外れんをば存じ候はず。御錠で候へば、仕つてこそ見候はめ。とて御前をまかり立ち、黒き馬の太く逞しきに、まるほやすつたる金覆輪の鞍おいて乗つたりけるが、弓取りなほし、

手綱かいくつて、汀へ向いてぞ歩ませける。

身方の兵共、與一が後を遙に見送つて、此の若者一定仕ら
うずると覺え候。と申しければ、判官もたのもしげにぞ見給
ひける。矢ごろ少し遠かりければ、海のをか一段ばかり打入
つたりけれども、なほ扇のあはひは七段ばかりもあるらん
とこそ見えたりけれ。頃は(一)二月十八日酉の刻ばかりのこと
なるに、折ふし北風はげしう吹きければ、磯うつ浪も高かり
けり。舟はゆりあげ、ゆりすゑて漂へば、扇もくしに定まらず
ひらめいたり。沖には平家船を一めん(一)に並べて見物す。陸に
は源氏くつばみを並べて之を見る。いづれもいづれも、はれ
ならずといふことなし。與一目をふさいで、南無八幡大菩薩
別しては我が國の神明、日光の權現、宇都の宮、那須のゆぜん

(一)壽永三年。

くしに定ま
らず

くつばみ
はれならず
といふこと
なし

一もみ二も
み

ひいふつと

よつびいて
ひやうと放
つ

大明神、願はくはあの扇のまん中射させてたばせ給へ。これ
を射損ずるものならば、弓きり折り自害して、人に再びおも
てを向ふべからず。今一度本國にかへさんと思し召さば、此
の矢外させ給ふなと、心の中に祈念して目を見開いたれば、
風も少し吹きよわつて、扇も射よげにこそなりたりけれ。與
一鏑を取つてつがひ、よつびいてひやうと放つ。小兵といふ
でう、十二束三ぶせ、弓はつよし、鏑はうらひやくほどに長な
りして、あやまたず扇の要際一寸ばかりおいて、ひいふつと
ぞ射きつたる。鏑は海へ入りければ、扇は空へぞあがりける。
春風に一もみ二もみもまれて、海へさつとぞ散つたりける。
皆くれなるの扇の日出いたるが、夕日にか々やくに、白波の
上に漂ひ、浮きぬ沈みぬゆられけるを、沖には平家ふなばた

ごよめく

をたゞいて感じたり。くがには源氏筋をたゞいてどよめき
けり。 — 平家物語 —

八 壇の浦 其の一

さるほどに源氏の兵どもいとゞ力を得て、平家の船に漕
寄せ、漕寄せ、亂れ乗る。遠きをば射、近きをば斬る。縦横散々に
攻む。水手、かんどり、櫓を棄て、楫を捨て、船を直すに及ばず、
射伏せられ、切伏せられ、船底に倒れ、水の底に入る。中納言は
女院、二位殿などの乗りたまへる御船に参られたりければ、
女房たち、こはいかになり侍りぬるぞ。と宣ひければ、今はと
もかくも申すに言葉足らず。かねて思ひ設けしことなり。と
てさわげる氣色もなし。手づから船の掃除して、見苦しき物

(一)平知盛。清盛の第三子。
(二)建禮門院徳高。清盛の女高倉天皇の中宮にして安徳天皇の御生母。
(三)清盛の後室平時子。

ども海に取入れ、こゝを拭へ、かしこを拂へ。などのたまへば、
「さほどの事になりはべるに、しづかなる御ふるまいかな。」と
て、女房たち聲々にをめき叫び給ふ。

(一)安徳天皇。

二位殿は今限りと見はて給ひにければ、練色の二衣ひ
きまとひ、白袴のそば高く挟みて御門を抱き奉り、帯にて我
が身に結びあはせ参らせ、寶劔を腰にさし、神璽を脇に挟み
て、ふなばたに臨み給ふ。御門は八つにならせ給ひけり。御年
の程よりはねびとゝのほらせ給ひて、御形あてに美しく、御
髪黒くふさやかにして、御背にかけ給へる御貌、たぐひ無く
ぞ見えさせ給ひける。御心迷ひたる御氣色にて、こはいづこ
へ行くべきぞ。と仰せられけるこそ悲しけれ。二位殿は、兵ど
もが御船に矢を参らせ候へば、別の御船へ行幸なし参らせ

あて

國母

候。とて、

今ぞ知るみもすそ河の流には

浪のしたにも都ありとは

と宣ひもはてず、海に入り給ひければ、八條殿同じく續きて入り給ひけり。國母建禮門院をはじめ奉りて、御門の御乳母帥典侍、大納言典侍以下の女房たち、船の艫舳に臥しまるび、聲をととのへて叫び給ふもおびたゞし。浮きもや上らせ給ふと暫しは見奉りけれども、二位殿も、八條殿も、深く沈みて見え給はず。昨は一天の主として、殿をば長生と祝ひ、門をば不老と名づけしかども、今は雲上の龍下りて、忽ちに海中の鱗となり給ふこそ悲しけれ。哀なるかな、花に喩へし十善の御粧、無常の風に匂を失ひ、悲しいかな、月に輝きし萬乗の玉

有待

體、蒼海の浪に影を沈めおはしますこと。無常もとより定めなし、有待誰かはたのみあるなれども、清涼紫宸の玉の臺を振捨て、鬪戦、兵革の船中に行幸して、いまだ十歳にだも満じ給はぬ御齡に、忽ちに波の底に入り給ひけん、哀といふもおろかなり。

九 壇の浦 其の二

(一)平教盛の第二子

前能登守教經は、元來心剛に身健にして、進むことありて退くことなし。軍敗れぬと見えければ、思ひ切り、死生知らずにあふるまふ。これぞ聞ゆる能登守とて、我先に我先にと争ひてかゝりけれども、少しも面を振らず戦ふ。矢頃に廻る者をばさしつめ、さしつめ射けるに、更にあだ矢なし。近づく者を

面を振らず

ば引寄せ、提げて海へ投入ければ、面を向け難し。

前新中納言知盛卿之を見て、よしなき事し給ふものかな。

此のともからは皆歩兵にこそ侍りぬれ。あながちに目に立

て給ふべきにあらず。自害をもし給へかし。と宣へば、さては

九郎冠者に組めとにこそ。それは存ずるところなり。いかゞ

はせんと伺ひ廻るところに、判官(一)の船と能登守の船とすり

あはせて通りけり。能登守然るべしとて、判官の船に乗移り、

兜を脱ぎすて、大童になり、鎧の袖草摺ちぎり捨て、軽々と身

をしたゝめて、何れ九郎ならんと馳せめぐる。判官かねて存

知して、とかく違つて組まじ、組まじと紛れ行く。さすが大將

軍と覺えて、鎧に小長刀突いたる武者一人あり。能登守目を

かけて、軍將義經と見るは僻目か。故太政入道の弟門脇中納

僻目か

大童

(一)同上。

(一)源義經。

ものものし

やすらふ

言教盛の二男に能登守教經。と名告り、にこと笑ひて飛びか
かる。判官は組んではかなはじと思ひて、尻足踏んでぞやす
らひける。大將軍を組ませじとて、郎等どもがたち隔て、たち
隔てしけれども、除け、やつばら。ものものし。とて、海の中へ踏
入れ取入れ、つと寄る。既に組まんとしければ、判官早業人に
すぐれたり。小長刀を脇に挟み、さしくゞりて、弓だけ二つば
かりなる隣の船へつと飛移り、長刀取直して、船端ににこと
笑ひて立ちたりけり。能登守は力無くして船に留り、あゝ飛
びたり、飛びたり。とほむ。

其の後能登守、今を限りと狂ひ廻りければ、面を向け難し。
こゝに安藝太郎時家といふ者あり。阿波國の住人安藝大領
といふ者の子なり。三十人の力持ちたりと聞ゆ。郎等二人あ

やは

剛の名

り同じく三十人の力持ちたり。時家二人の郎等にいひけるは、吾等三人心を一つにして組まんには、鬼神といふとも負くまじ。能登殿強しといふとも、やは三人には勝ち給ふべき。三人取つてあはずれば、九十人が力なり。私の力業は人の證據に立たず。能登守に組んで、力をも人に知らせ、剛の名をも極めんと思ふはいかに。といへば、郎等ども、仔細にや及ぶべき。とて、三人一度に鎧を傾け、打つてかゝる。能登守は、源氏の郎等に名もあり、力もあればこそ、教經にはかゝるらめ。これぞ軍の最後なると思ひければ、しづくゝと相待つところに、三人鼻をならべ、隙間も無くつと寄る。一人をば海中へたうと蹴入れ、二人をば左右の脇にかい挟んで、一しめしめて、いざおのれら、教經が御伴申せ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。と

て、海の底へぞ沈みける。

(一)清盛の弟。

(二)内大臣平宗盛。

(三)宗盛の長子清宗。

前平中納言教盛、同新中納言知盛は、一所におはしけるが、伊賀平内左衛門を召されて、いかに家長、見るべき事は見つ。御門を始め参らせて、一門の人々自害し海に入りぬ。今までもかくあればつれなき命を惜しむに似たり。大臣殿はいかになり給ひぬるやらん。と問ひ給ふ。家長涙を流して、大臣殿、右衛門督殿二人は、一度に海に入り給ひたりつるを、敵熊手(三)にかへ奉りて、二所ながら引上げ、捕りまゐらせ候ひぬ。と申しければ、知盛卿、あな心う、など深くは沈み給はざりけるぞ。と二度宣ひて、涙をはらくと流して、今は何をか見聞くべき。家長、日ごろの約束はいかに。と仰せられければ、今さら君に離れ奉りて、いづちへ行くべきに候はず。御伴なり。と申せ

蜀江の錦

ば、知盛卿、世に嬉しげに思ひて、平中納言教盛卿と、鎧脱捨てて、西に向ひ念佛申して、兩人自害せられければ、有國家長以下侍八人、同じ枕に自害して伏しぬ。あはれ此の人に世を譲りたらししかば、たとひ運のきはみなりとも、都にていかにもなり給ひなましと、惜しまぬ者は無かりけり。

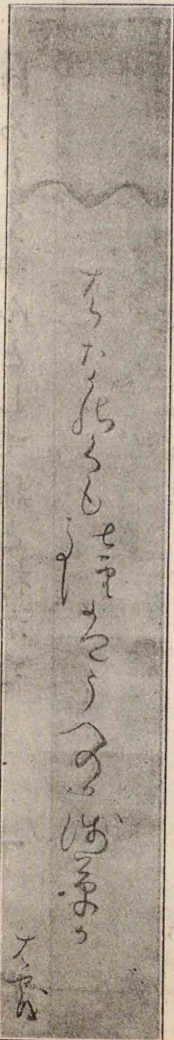
赤旗、赤符、海上に充滿ちて、紅葉を嵐の吹散したるが如し。海水も血に變じて、渚々に寄する波、薄紅にぞ流れける。主を失へる船は風に隨ひ、潮に引かれて、越路の雁の行を亂るが如く、膚を離れたる衣は水に浮き、波に争うて、蜀江の錦の色を洗ふかと疑はる。玉樓金殿の昔の榮華、船中浪底の今の有様思ひ並べて哀なり。元暦二年の春の暮、いかなる年、いかなる日ぞ、一人海底に沈み、百官水の泡と消えぬ。——源平盛衰記——

一〇 春夏の句

唐崎の松は花よりおほるにて
雲雀より上にやすらふ味かな
ほろくと山吹散るか瀧の音

芭蕉

花のくも鐘は
上野か淺草か
芭蕉



蹟筆蕉芭
(藏氏冷竹田角)

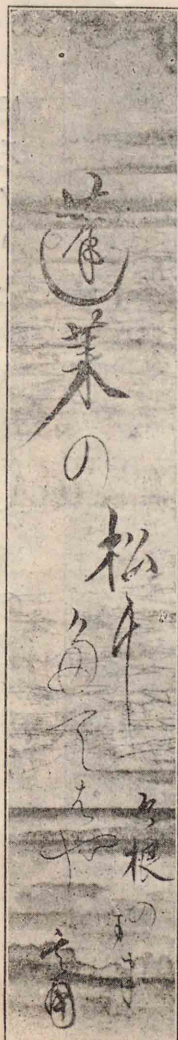
鶯の身をさかさまに初音かな
梅一輪一輪づつのあたゝかさ
わが事と泥鰯のにげし根芹かな
何事ぞ花見る人の長刀

其角
嵐雪
丈草
去來

蓬萊の松にた
てばや曾根の
松 其角

長松が親の名でくる御慶かな
世の中は三日見ぬ間に櫻かな
春の海ひねもすのたりくかな
菜の花や月は東に日は西に
けるりくわんとして鳥と柳かな

野 坡
蓼 太
蕪 村
一 茶



蹟筆角其
(藏氏冷竹田角)

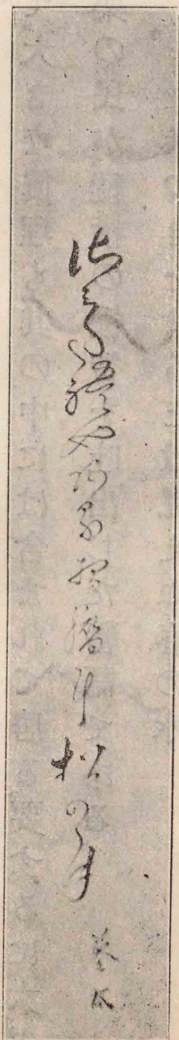
長持に春かくれ行く更衣
五月雨をあつめて早し最上川
目に青葉やまほとゝぎす初鯉
行水の捨てどころなし蟲の聲

西 鶴
芭 蕉
素 堂
鬼 貫

さみだれやあ
る夜ひそかに
松の月 蓼太

夕涼よくぞ男に生れける
子規啼くや湖水のさゝにどり
橋落ちて人岸にあり夏の月

其 角
丈 草
太 祇



蹟筆太蓼
(藏氏冷竹田角)

富士一つ埋みのこして若葉かな
石工の鑿ひやしたる清水かな
蘭田刈つて水鶏に遠き寢覺かな

蕪 村
蓼 太

一一川 柳

川柳は俳句と同じく、十七音から成立つもので、世界の文

詩形
背景

諷刺

寸鐵人を殺す

太平享樂の
民
警語

學中、これ程の短い詩形はない。俳句は自然を詠じ、自然を背景として人事を詠ずるものであるが、これは人事の觀察を主として、社會の短所や缺點を諷刺する。詩形の短いのが、其の生命で、寸鐵人を殺すの切味がある。それ故昔から山椒の實の小さくて辛いのに譬へられ、川柳點のうがちと稱へられて居る。其のうがちには、思はず腹を抱へる滑稽味もあつて、大きな眞理も其の中には含まれて居る。要するに、太平享樂の民が、縦横の機智を吐出した警語である。

米つきをするとは見えぬ春の水

藤棚へ隠元豆が推參し

よつ引いてひやうと放さぬ案山子かな

朝顔も鳴海絞の店を出し

人化

景趣を人化して、輕妙な滑稽を寓したのである。

梅干に餅の戸板をそめ直し

紹の羽織螢が着るとしまひなり

すりこ木で下女の砧の加勢をし

据風呂に下女がいる内春になり

四季推移の風流も、日常の人事から觀察すれば、面白みもあり、をかしみもある。

物申に手間をとらせるまつばだか

咽に餅がつまりましたと書いて見せ

立關番遠吠ほどなあくびをし

笑うたもあとからこけるすべり道

高輪へ出ると忘れた事ばかり

追分は股をひろげて道を聞き
不意に起る懈怠失策、些細な行動をも見逃さぬ機警が、思はず失笑を催させる。

矛盾

風呂敷をとけば南瓜と伯母の文
隠居所をねめく、かへる里の親
二代目は人のものだと左官いひ
あねはひき弟は論語卷の一
大學を教へきらずに越してゆき
明店の右左鍛冶屋に粉屋なり
家賃より高い染ちん着る女房
これ等は人情の微を穿つて、家庭の波瀾も、社會の矛盾も、笑の中に諷刺せられるのである。

市井

さては信仰の神聖を破つて、
毘沙門は芥子のきいた顔つ付
大佛は見るものにして尊まらず
観音の千の矢さきに五百うそ
などと茶化してしまふ。
川柳子にあつては、古の英雄豪傑も市井の匹夫匹婦と同じに取扱はれる。
源三位入齒を嚙んで悔しがり
三保谷が歸りは首に日が當り
清盛は初手は瘡だなどといひ
山伏にたびく、化ける源氏方
など、かういふ類も澤山ある。

一門の仇は禪尼の慈悲から出
ひとさかり六十餘州後家差配

などは時代の史論とも見られるであらう。

短簡な語中に深大な教訓を含んで居るのは諺と同じである。諺よりも面白みの多いのは、常に滑稽を伴なつて居るからである。

一一一 カーライル博物館 其の一 夏目漱石

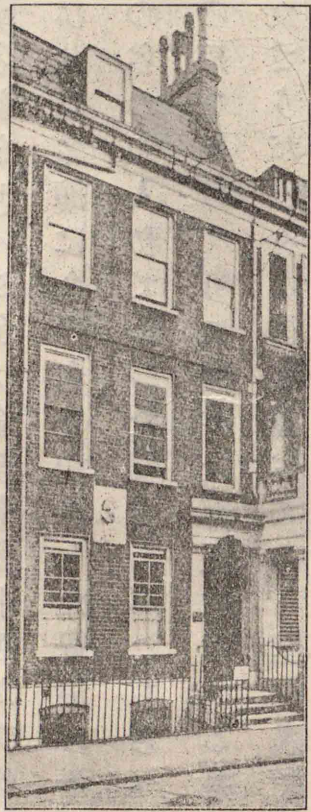
チェイン・ローは河岸端の往來を南に折れる小路で、カーライルの家は、其の右側の中頃に在る。番地は二十四番だ。

毎日の様に、川を隔て、霧の中にチェルシーを眺めた余は、或朝遂に橋を渡つて、其の有名な庵を叩いた。

(1) Cheyne Row, Carlyle. 英國十九世紀の文豪。史學文學の著作に富む。(西曆一七九五—一八八一)
(2) Chelsea 倫敦市中の南西に當る地。テムズスの北岸に臨む。

脂っこい

庵といふと、物寂びた感じがある。少くとも瀟洒とか、風流とかいふ感を伴ふ。併しカーライルの庵はそんな脂っこい華奢なものではない。往來から直ちに戸が敲ける程の道傍に建てられた四階造の眞四角な家である。出張つた所も



家のルイラーカ

引込んだ所も無いのべつに眞直に立つて居る。まるで大製

のべつに

造場の煙突の根本を切つて來て、之に天井を張つて窓をつけた様に見える。

余は今此の四角な家の石階の上に立つて、鬼の面のノッ

(3) Knocker.

恰好

カーを、コツ／＼と敲く。暫くすると、内から五十恰好の太つた婆さんが出て来て、「おはいり。」といふ。最初から見物人と思つて居るらしい。婆さんは、やがて名簿の様なものを出して、「御名前を。」といふ。余は倫敦滞留中、四たび此の家に入り、四たび此の名簿に余の名を記録した覺がある。此の時は實に余の名の記入初であつた。婆さんがこちらへといふから、左手の戸をあけて、町に向つた部屋にはいる。是は昔客間であつたさうだ。色々な物が並べてある。壁に畫やら、寫眞やらがある。大概はカーライル夫婦の肖像の様だ。後の部屋に、カーライルの意匠に成つたといふ書棚がある。それに書物が澤山詰つて居る。むづかしい本がある、下らぬ本がある、古びた本がある、讀めさうもない本がある。其の外にカーライルの八

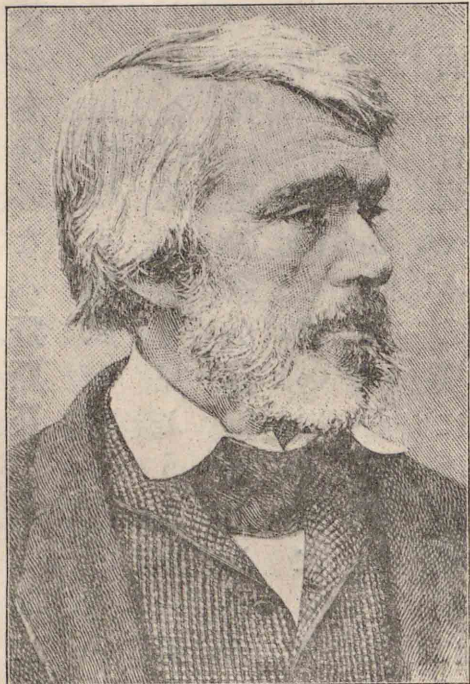
①Bismarck. 獨逸の政治家。四層一八八
一五—一八九
八) Frederick. 普魯西中興の
英主フレデリ
ク二世。西
曆一七—二
一七八六)

十の誕生日の記念のために鑄たといふ銀牌と銅牌とがある。金牌は一つも無かつた様だ。すべての牌と名のつくものが、無暗にかち／＼して、何時までも平氣に残つて居るのを、貰つた者の煙のやうな壽命と對照して考へると、妙な感じがする。それから二階へ上る。こゝに又大きな本棚があつて、本が例の如く一ぱい詰つて居る。やはり讀めさうもない本、聞いた事のなささうな本、入りさうもない本が多い。勘定をしたら百三十五部あつた。此の部屋も、一時は客間になつて居つたさうだ。①ビスマークがカーライルに送つた手紙と、普魯西の勳章がある。②フレデリック大王傳の御禮と見える。案内者は、いづれの國でも同じものと見える。さつきから婆さんは室内の繪畫器具に就いて一々説明を與へる。五十

抑揚節奏

年間案内者を専門に修行した者でもあるまいが、非常に熟練したものである。何年何月何日にどうした、かうしたと、恰も口から出任せに喋舌つて居る様である。しかも其の流暢な辯舌に、抑揚があり、節奏がある。調子が面白いから其の方ばかり聽いて居ると、何を言つて居るのが分らなくなる。初のうちには聞返したり、問返したりして見たが、しまひには面倒になつたから、御前は御前で勝手に口上を述べなさい。わしはわしで自由に見物するからといふ態度をとつた。婆さんは人が聽かうが聽くまいが、口上だけは必ず述べますといふ風で、別段厭きた氣色もなく、怠る様子もなく、何年何月何日をやつて居る。

余は東側の窓から首を出して、ちよつと近所を見渡した。



ルイラカ

眼の下に十坪程の庭がある。右も左も、又向ふも、石の高塀で仕切られて、其の形はやはり四角である。四角はどこ迄も此の家の附屬物かと思ふ。カーライルの顔は決して四角ではなかつた。彼は寧ろ懸崖の中途が陥落して、草原の上に伏しかゝつた様な容貌であつた。細君は上出來の薙らんきょうの様に見受けられる。今余の案内をして居る婆さんは、餡あん麵めん包ぱうの如く圓い。余が婆さんの顔を見て、成程圓いと思ふ時、婆さんは又何年何月何日

を誦し出した。余は再び窓から首を出した。

カーライルいふ、裏の窓より見渡せば、見ゆるものは茂る葉の木株、碧なる野原、及び其の間に點綴する勾配の急なる赤き屋根のみ。西風の吹く此の窓の眺は、いと晴やかに、心地よし。余は、茂る葉を見ようと思ひ、碧なる野を眺めようと思つて、實は裏の窓から首を出したのである。首は既に二遍許出したが、碧にも、青いにも、何にも見えぬ。右に家が見える、左に家が見える、向ふにも家が見える。其の上には鉛色の空が一面に、胃病やみの様に不精無精に垂懸つて居るのである。余は首を縮めて、窓から引込めた。案内者はまだ何年何月何日の續きを朗に讀誦して居る。

カーライル又いふ、倫敦の方を見れば、眼に入るものはウエ

不精無精

ストミンスター・アベ―と、セント・ポール寺の高塔の頂のみ。其の他幻の如き殿宇は、煤を含む雲の影の去るに任せて隠見す。と、倫敦の方とは既に時代後れの話である。今日チエルシ―に來て倫敦の方を見るのは、家の中に坐つて家の方を見ると同じ理窟で、自分の眼で自分の見當を眺めるといふのと、大した差違はない。然しカーライルは自ら倫敦に住んで居るとは思はなかつたのである。彼は田舎に閑居して、都の中央にある大伽藍を遙に眺めた積であつた。余は三度首を出した。そして彼の所謂倫敦の方へ視線を延した。然しウエストミンスターも見えぬ。セント・ポール寺も見えぬ。數萬の家、數千萬の人、數百萬の物音は、余と堂宇との間に立ちつゝある、漾ひつゝある、動きつゝある。千八百三十四年のチエルシ

堂宇

―と今日のチェルシーとは、まるで別物である。余は復首を引込めた。婆さんは默然として、余の背後に停立して居る。

一三 カーライル博物館 其の二

無器用
九鼎

三階に上る。部屋の間を見ると、冷にカーライルの寢臺が横たはつて居る。青い戸帳が物靜に垂れて、空しい臥床の裡は、寂然として薄暗い。木は何の木か知らぬが、細工はたゞ無器用で、素朴であるといふ外に、何等の特色もない。其の上を身を横たへた人の身の上も思ひ合はせられる。傍には彼が平生使用した風呂桶が、九鼎の如く尊げに置かれてある。風呂桶とはいふものの、鍋のやゝ大きいものに過ぎぬ。彼が此の大鍋のなかで、倫敦の煤を洗ひ落したかと思ふと、益

往生
面型

其の人となりか偲ばれる。ふと首を上げると、壁の上に彼が往生した時に取つたといふ漆喰製の面型がある。此の人だと思ふ。此の巨燧位の高さの風呂に入つて、此の質素な寢臺の上に寢て、四十年間やかましい小言を吐續けに吐いた顔は、これだと思ふ。婆さんの淀みなき口上が、電話口で横濱の人の挨拶を聞く様に聞える。

「宜しければ上りませう。」と、婆さんがいふ。余は既に倫敦の塵と音を遙の下界に遺して、五重塔の天邊に獨坐する様な気分がして居るのに、耳の元で「上りませう。」といふ催促を受けたから、まだ上があるかなと不思議に思つた。「さあ上らう。」と同意する。上れば上るほど怪しい心持が起りさうであるから。

縹渺

四階へ來た時は、縹渺として、何事とも知らず嬉しかつた。嬉しいといふよりは、どことなく妙であつた。こゝは屋根裏である。天井を見ると、左右は低く、中央が高く、馬の鬣のやうな形をして、其の一番高い背筋を通して、硝子張の明取が着いて居る。此の屋根裏に洩れて來る光線は、皆頭の上から直ちにはいる。さうして、其の頭の上は硝子一枚を隔て、全世界に通ずる大空である。眼に遮るものは微塵もない。カーライルは自分の經營で此の室を造つた。造つて之を書齋とした。書齋として、こゝに立籠つた。立籠つて見て、始めて我が計畫の非なることを悟つた。夏は暑くて居りにくい、冬は寒くて居りにくい。案内者は朗讀的にこゝまで述べて、余を顧た。眞圓な顔の底に、笑の影が見える。余は無言の儘うなづく。

懊惱

Cairn

カーライルは何の爲に此の天に近き一室の經營に苦心したか。彼は彼の文章の示す如く、電光的人であつた。彼の痼癖は彼の身邊を圍繞して無遠慮に起る音響を無心に聞流して、著作に耽るの餘裕を與へなかつたと見える。洋琴の聲、犬の聲、鶏の聲、鸚鵡の聲、一切の聲は悉く彼の鋭敏な神經を刺戟して、懊惱已む能はざらしめたる極、遂に彼をして天に最も近く、人に最も遠ざかれる住居を、此の四階の天井裏に求めしめたのである。

彼の⁽¹⁾エイトキン夫人に與へた書翰にいふ、此の夏中はあけ放ちたる窓より聞ゆる物音に悩まされ候事一方ならず。色々修繕も試み候へども、寸毫も利目これ無く、それより篤と熟考の末、家の眞上に二十尺四方の部屋を建築いたす事

に取極め申候。是は壁を二重にいたし、光線は天井より取り、風通しは一種の工夫をもつて、差支なき様いたす仕掛に候へば、出来上り候上は、假令天下の鶏ども一時に関の聲を揚げ候とも、閉口仕らざる積に御座候。

呪の如く

かくの如く豫期せられた書齋は、二千圓の費用をかけ、先づ先づ思通りに落成を告げて、豫期通りの効果を奏したが、下層に居る時は、考だに及ばなかつた寺の鐘、汽車の笛、さては何とも知れず、遠きより來る下界の聲が、呪の如く彼を追ひかけて、舊の如くに彼の神経を苦しめた。

再び階段を下りて、最後に勝手口から庭に案内された。例の四角な平地を見廻して見ると、木らしい木、草らしい草は少しも見えぬ。婆さんの話によると、昔は櫻もあつた、葡萄も

あつた、胡桃もあつたさうだ。

カーライルが麥藁帽を阿彌陀に被つて、寝巻姿のまま、銜へ煙管で逍遙したのは此の庭園である。夏の最中には蔭深き敷石の上にさゝやかな天幕を張り、其の下に机をさへ出して、餘念も無く述作に従事したのも此の庭園である。星明らかなる夜、最後の服をのみ終つたのち、彼が空を仰いで、「嗚呼予が最後に汝を見るの時は瞬刻の後ならん」と叫んだのも此の庭園である。

別世界

余は婆さんの勞に酬いる爲に、婆さんの掌の上に一片の銀貨を載せた。「有難う」といふ聲さへ朗讀的であつた。一時間の後、倫敦の塵と、煤と、馬車の音と、テムス河とは、カーライルの家を別世界の如く、遠き方へと隔てた。

— 濛虚集 —

一四 尺牘二則

一 立志を勧む

橋本左内

志とは心のゆく所にして、我が心の赴き候所をいふ。士に生れて忠孝の心無き者は無し。忠孝の心これあり候て、我が君は御大事にて我が親は大切なる者と申す事聊かにても合點ゆき候はゞ、必ず我が身を愛重して、何卒我こそ弓馬文學の道に達し、古代の聖賢君子英雄豪傑の如く相成り、君の御爲はたらし、天下國家の御利益にも相成候大業を起し、親の名までも揚げて、醉生夢死の者には成るまじと直ちに思ひつき候ものにして、これ即ち志の發する所なり。志を立つるとは、此の心の向ふ所をきつと相定め、一度右の如く思ひ

醉生夢死

詰め候はゞ、彌切に其の向きを立て、常に其の心得を失はぬやうに持ちこたへ候ことに候。

凡そ志と申すは、書物にて大いに發明致候か、或は發憤激勵致候かの所より立ち定まり候ものにて、平生安樂無事に致居り、心のたるみ居候時に立つことは無し。志無き者は魂無き蟲に同じ。いつまで經ち候ても、丈の伸ぶること無し。志一度相立ち候へば、其の以後は日夜追々成長致候ものにて、萌芽の草に膏壤を與へたるが如し。古より俊傑の士と申候人として、目四つ口二つこれ有るにては無し。皆其の志大なると逞しきとにより、遂には天下に大名を揚げ候なり。世上の人多く碌々にて相果て候は他に非ず、其の志大きく逞しからぬ故なり。志立ちたるものは、恰も江戸立と定めたる人の

如し。今朝一度御城下を踏出し候へば、今晚は何の莊、明夜は彼の宿と申すやうに、追々先へ先へと行き候ものなり。譬へば聖賢豪傑の地位は江戸の如し。今日聖賢豪傑に似合はざる所を取去り候へば、いかほど短才劣識にても、遂には聖賢豪傑に至らぬと申す理はこれ無し。ちやうど足弱の者にて、も一度江戸行きを極め候上は、竟には江戸まで到着すると同じき事に候。

さて右様志を立て候には、物の筋多くなることを嫌ひ候。我が心は一道に取極め置き申さず候はでは、戸じまり無き家の番する如く、盗人や犬が方々より忍び入り、とても一人にては番は出来ぬなり。また家の番人は随分傭人にて、も出来候へども、心の番人は傭人出来申さず候。さすれば自分の

多岐亡羊

心迷ひ候て、人が詩を作れば詩、文を書けば文、武藝とても朋友に槍に精出す者あれば、我が今日まで習ひ居たる太刀業をやめて槍と申すやうになり易きものにて、これは正覺とらぬ第一の病根なり。故にまづ我が知識聊かにて、も開け候はば、篤と我が向ふ所爲す所を定め、其の上にて師に就き友に謀り、我が及ばぬ所足らぬ所を補ひ、それと一つに極め置きたる處に志を定めて、心多端に流れて多岐亡羊の失無からんこと願はしく候。すべて心の迷ふは心の幾筋にも分れ候處より起り候ことにて、心の紛亂致候は、我が志未だ一定せぬ故なり。心収まらずしては、聖賢豪傑には成られぬものにて候。

何分志を立つる近道は、經書又は歴史の中にて我が心に

大いに感通致候處を書抜き、壁に貼り置き候か、又は扇などに認め置き、日夜朝暮それを認めながら我が身を省察して、其の及ばざるを勉め、其の進むを樂しむやう心がけ候こと肝要にして、志すでに立ち候とも學を勉むること無くば、志彌大きく逞しくはならずして、動もすれば聰明は前の時よりも減じ、道德は初めの心に慚づるやうになり行くものにて候。

二 弟に與へて天理を諭す 澤庵

御手前萬事御才覺肝要に候。先書に、何事も天道次第との御文尤もに候。其の分なる儀も候へ共、たゞ天道より金銀米錢を與へたる事は無く候。人の才覺にて候。例へば、一石の米

を片端食ひはて、其の時天道より借銀借米有るまじく候。何事も人間の業と御心得有るべく候。天道は此方次第のものにて候。世上申す天道は杳に違ひ申候。昔今に蓮の葉は丸く松の葉は細く候。其の如く我が身に應ずる天道をよくわきまへ、小身の者は引下りて華麗をせず、大名はそれ程に身を持つ所即ち天道に任すと申候。百石取る身にて、二百石取る人の體、天道に背き身に不似合のふるまひをする人は、一生貧乏神の責物にて候。鵜の眞似する鳥は水に溺れて死する、天道の罰にて候。鵜は鵜、鳥は鳥の働、天道の本理にて候。か様なる謂を知らずして、天道とばかり人毎にいうて寝てゐても、天道より食を與へられ候様に思ふ事、大なる誤なり。人は品々に世を渡る天道にて候。然るに、細工人も定規無くて

はならざるものにて候。人は人を定規にするが善く候。但し我が心の様なる人を定規にせば、三五の十八にて候。分限を我と申さずして、身を持つ分別、能く摺切れぬ人と申す事に候。杓子定規如何、貴殿のは御分限より振廻し手廣く見え申候。是は天道に御背き候間、つまり悪しく候。半分笑止に候。我等申す事違ひ申すまじく候。冬は寒きものにて候。若し暖まらば、明年涼しからず、夏暑からざれば、秋萬事あしく候。物事に位の正しき處が天道にて候。大小ともに身の分限に應じて、十人抱へて然るべく候はゞ、七八人の心持にて後悔少く候。月を御覽じ有るべく候。十五夜は圓滿に候へば、一分づつかけ申候。是れ人間の見せしめなり。天は其の光を人の思へたゞ満つればやがて缺くる月の

いざよひの空や人の世の中

此の歌至極の理に候。長文の體むづかしく候へども、兄弟に生れあひ、御爲よく候へかしと是の如くに候。何卒風を御かへ候て、借金（漢書、讀傳）の無きやうに御分別專一に候。親類に遠ざかり、親しき知音に恨を結ぶも、多分貧乏にて候。

心だに誠の道にかなひなば

いのらずとても神や守らん

皆是にて候。

尙後音の時を期し候。 恐惶。

一五 芳流閣上の血戦

瀧澤馬琴

古の人謂はずや、禍福（一）は糾（一）へる繩のごとし。人間萬事往く

（一）禍之與福兮
何異之糾纏也
（漢書、讀傳）
禍福は糾へる繩

塞翁が馬

(一)禍兮福所
伏、福兮禍所
至、知_二其
極_一(老子)

として塞翁が馬ならぬはなし。こは福の倚る處はた禍の伏する所、彼にあれば此にあり、とは思へども豫てより誰かよく其の極を知らん。憐むべし犬塚信乃は親の遺言、記念の名

刀、心に占めつ、身につけつ、艱

苦のうち、に年を経て、得難き

時を得てしかば、遙々、濟我へ

齎して、名を揚げ、家を興すべ

かりし、其の福は禍と、ふりか

はりたる、村雨の、又は故の物

ならず、我が身を劈く、讐とぞなりし、憾を爰に釋く由もなく、

綽急にして、意外にあり、僅かに當座の辱を避けばやと思ふ

ばかりに、夥の圍を切開きて、芳流閣の屋の上に、攀登れども

とにかくに、脱れ去るべき道の無ければ、其處に必死を極め

たる、心の中は如何なりけん、思ひ遣るだにいと痛まし。

されば又犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして、月來獄

舎に繋がれし、禍は今恩赦の福、我が縛の索解けて、人にぞか

かる、捕手の役儀、犬塚信乃を搦めよ。とて、愨に擇みいだされ

つ。他の憂を身の面目に、今更用ひられん事、願はしからずと

思へども、辭みて許さるべくもあらぬ、君命重く、彌高き、彼の

樓閣は三層なり、其の二層なる櫓の上まで、身を霞ませて登

りて見れば、足下遠く雲近く、照る日烈しく堪へがたき、頃は

六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の、燄熱を渡る敷瓦は、凸凹

隙なく波濤に似て、下には大河滔々たる、こゝ生死の海に入

る、流は名に負ふ坂東太郎、水際の、小舟楫を絶えて、進退既に

(一)下總國古河。



瀧 澤 馬 琴

身を霞ませ

楫を絶え

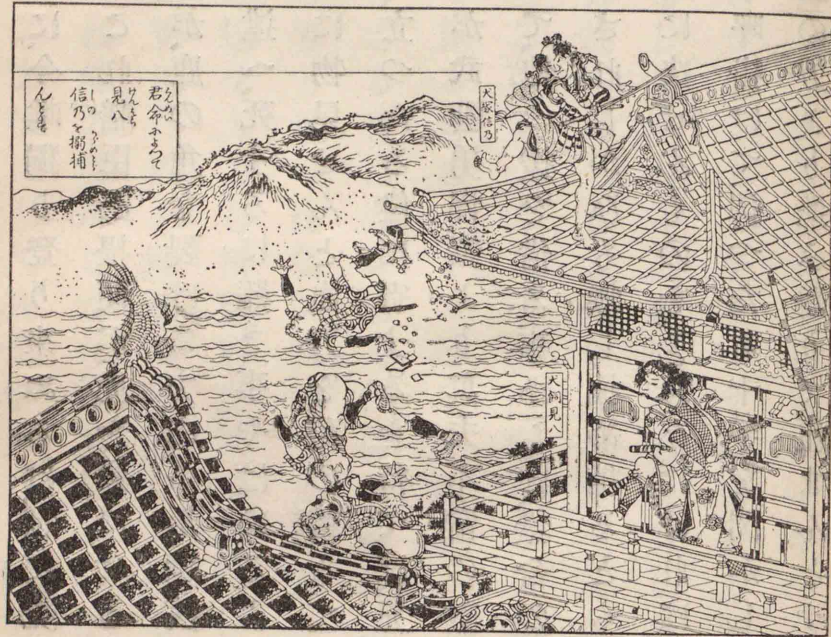
浮圖

谷りし、敵にしあればいかで我、繋ぎ留めんと、颯の、樹傳ふ如くさらくくと、登り果てたる三層の、屋根には目柴、翳す由も無く、透に透を窺ひつゝ、睨まへあうて立つたる有様、浮圖の上なる鶴の巢を、巨蛇の狙ふに似たりけり。

(一) 足利持氏の子。鎌倉の管領。
(二) 管領足利氏の執權職。

廣庭には成氏朝臣、横堀史在村等の、老黨若黨圍繞せし、床几に腰を打掛けて、勝負いかにと見上げたり。又閣の東西には、腹巻したる許多の士卒、槍、長刀を煌かし、或は箭を負ひ、弓杖突立て、組んで落ちなば、擊留めんとて、項を反して之を觀る。然のみならず外面は、連綿として杳なる、河水遠りて砌を浸せば、たとひ信乃武事長け、膂力衰へず、よく見八に捷ちたりとも、墨氏が飛鳶を借らざれば、虚空を翹るべくもあらず。魯般が雲の梯無ければ、地上に下るべくもあらず。渠鳥なら

(三) 周代の哲學者。名は程。魯の人。
(四) 名は公輸般。



(高挿傳犬八見里) 戦血の上閣流芳

ずも羅に入りぬ。獸ならずも狩場に在り。三寸息絶ゆれば、絆みな休まん。脱れ果てじと見えたりけり。
其のとき信乃思ふやう、初層、二層の屋の上まで、追登らんとせし兵等を、切落しつる其の後は、絶えて近づく者な

(一) 飲明天皇の朝、百濟に使し、雪夜に虎の窟を探りて、虎を獲たる人。
(二) 和田義盛の臣。將軍實朝の御前にて、重筒の大鹿角を折る。

御詫さふ

きに、今唯獨り登り來ぬるは、世に覺ある力士ならん。きやつはこれ膳臣巴提便が、虎を暴てつちにせる勇あるか、また富田(一)の三郎が、鹿の角を裂ける力あるか。遮莫一人の敵なり。引組ひきんで刺違へ、死するに難き事やはある。よき敵にこそ御座んなれ。目に物見せんと血刀を、袴の稜せまもて推拭おひ、高瀬の如き方桴かたばたに、立つたる儘に寄するを待てば、見八も亦思ふやう、彼の犬塚が武藝勇悍、素より萬夫不當の敵なり。ざりととても搦めかねて、他の援を借る事あらば、獄舎の中より此の役儀に、擇み出されしかひも無し。搦め捕るとも撃たるゝとも、勝負を一時に決せんものを。と思ひにければ些ちつとも擬議せず、御詫さふ。と呼掛けて、持つたる十手を閃かし、飛ぶがごとくに方桴の、左の方より進み登りて、組まんとすれども寄せ附けず、心得

一上一下

手練

見る目はるか

たり。と鋭き太刀風に、撃つをはつしと受留めて、拂へば透かさずこむ刀尖さきを、支へて流す。一上一下、亡る囊を踏止めて、頻りに進む捕手の秘術、彼方も劣らぬ手練の働、嵩より落す太刀筋を、あちこち外す虚々實々、未だ勝負をわかざれば、廣庭なる主従士卒は、手に汗握らざるもなく、瞬もせず氣を籠めて、見る目もいとゞはるかなり。
さる程に犬塚信乃は、侮り難き見八が武藝に、敵を得たりけりと思へば、勇氣彌増して、刀尖より火出づるまで、寄せては返す太刀音、掛聲。兩虎深山に挑む時、錚然として風發り、二龍青潭に鬪ふ時、沛然として雲起るも、かくぞあるべき。春ならば峰の霞か、夏ならば夕の虹か、と見るばかりなる。いと高き閣の棟にして、死を争ひし爲體、世に未曾有の晴業なれば、

覆車

見八は被籠こみの鎖くわ、肱こで當あたのはづれを、裏かくまでに切裂かれしかど、太刀を抜かず。信乃は刀の刃も續かで、初に淺痕を負ひしより、次第に疼いたみを覺ゆれども、足場を計りて、撓たがまず去らず、疊かさねみかけて撃つ太刀を見八右手に受流して、返す拳に付入りつゝ、やつと掛けたる聲と共に、眉間を望みて、礮ばたと打つ、十手を丁と受留むる、信乃が刃は鏢際より、折れて遙に飛失せつ。見八得たりと無手むしゅと組むを、そが儘左手に引着けて、迭たがひに利腕楚しゅと取り、振倒ねぞさんと曳聲えいご合せて、揉みつ揉まるゝ力足、これかれ齊しく踏ふ込こらして、河邊の方へころゝと、身を輾まばせし覆車の俵、坂より落すに異ならず。勾配險しき棧閣かきざりに、削り成したる藁の勢、止るべくもあらざめれど、迭にとつたる手を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙なる河水の底に

は入らで程もよし、水際に繋げる小舟の中へ、打累かまりつゝ、挫くと落つれば、傾く舷へりと立つ浪に、ざんぶと音する水煙すゐえん、纜ともづなちやうと張切つて、射る矢の如き早河の眞中まなかへ吐出されつ。しかも追風と引く潮に、誘ふ水なる下り舟、行方も知らずなりにけり。

—南總里見八犬傳—

一六 故郷

其の一

徳富蘇峰

「富貴にして故郷に歸らざるは、繡を衣て夜行くが如し。誰かこれを知る者ぞ。」とは、沐猴冠者の語なれども、實に不朽の眞理を蘊くみたるものと謂ふべし。業成り名遂げたる者、誰か故郷に歸るを欲せざらん。看よ、笈かたを負ひて東京に出で、一片の卒業證書を懷にすれば、歸心矢の如く、之を故郷の親近、父(一)楚王項羽。
歸心矢の如し

(1) Thinkers. 佛國の政治家。一八三六年大宰相となる。(四曆一七七七) 一八七七

(2) Minister. 耶穌舊教。

老に示さんと欲するにあらずや。彼等何すれぞ故郷に戀々たる。(1) チエールが大宰相と爲るや、歸りて其の郷先生を訪ふ。先生曰く、君は何の職業をなせるか。チエール答へて曰く、余はミニストルなり。先生色を變じて曰く、君はカトリック宗の信者にあらずや。改宗して新教に入りたるか。何ぞミニストルと爲れる。曰く、余が所謂ミニストルは傳教師の謂に非ずして、宰相の謂なり。先生笑つて曰く、戲言する勿れ。君焉ぞ大宰相たるを得ん。曰く、先生疑ふ勿れ。若し余が言を信ぜざんば、先生望む所をのべよ。余必ず先生の爲に之を遂げ得せん。と。先生曰く、余や他に望む所なし。余の郷費を掌る十數年、而して未だ教育恩給に與るを得ず。君若し宰相たらば、請ふ余が爲に之を辨ぜよ。と。幾ばくもなくして、郷先生に恩給

(1) 支那漢高祖の將軍。紀元前一九六歿。

漂母

(2) 支那春秋戰國時代の政論家。紀元前三一七歿。

炊がざりし嫂、紐を下らざりし妻

郊迎

(3) 漢高祖。

Mount Vernon

爛焉

草澤山野

曠世の偉業

令は下れり。韓信が楚王となるや、嘗て己を辱しめたる惡少を封じて都尉と爲し、一飯の徳ある漂母に向つて千金を施したり。(2) 蘇秦が累々たる六國の相印を帶ぶるや、先づ其の故郷に歸り、己が爲に炊がざりし嫂、紐を下らざりし妻をして、蛇行匍匐四拜、三十里外に郊迎せしめたり。(3) 漢高の天下を平定するや、豊沛の父老を訪へり。太閤の小田原陣より旋るや、先づ銀杏村に入れり。華聖頓の退休するや、依然たるマオント・ヴォルノンの一農夫と成れり。彼等が爛焉たる偉勳は天下萬人の仰ぐ所なり。胡ぞそれ草澤山野二三の父老の憐を乞ふを要せんや。而して彼等が天下に向つて曠世の偉業を建つるや、恰も小學校生徒が進級證を懷にして、先づ其の父母に示すが如く、故郷の父老に示す所以のものは何ぞや。

(一)孤軍奮闘破
圍。一百里
程。巖間。吾
劍。摧吾馬
斃。秋風埋骨
故郷山。

好遇

虐待

(1) Christ.

(2) Maria.

(3) Jaco.

(4) Jose.

(5) Simon.

(6) Juda.

(7) Bethlem.

獨り之に止らざるなり。彼等は得意の時にのみ故郷を求めざるなり。失意の時にも求むるなり。看よ、南洲は其の死せんとする時に際しても、尙(一)秋風埋骨故郷山。と言ひしにあらざるや。彼等は故郷より好遇せらるゝが爲に、故郷を愛するに非ず。虐待せらるゝも尙故郷を愛するなり。孔子魯を去る、遅遅として行きしに非ずや。基督(二)の如きは、其の郷人より、彼は大工の子にあらずや。母はマリア(三)にあらずや。其の兄弟はヤコブ(四)、ヨセ(五)、シモン(六)、ユダ(七)にあらずや。其の妹等は我儕とともに在るにあらずや。彼如何なる奇才異能ありや。と彼を厭ひ、彼を棄てたるに拘らず、彼は屢、其の故郷なるベトレヘム(七)に還りしに非ずや。彼は曰く、豫言者は其の故郷に尊ばれず。と。彼之を知る。然れども尙其の故郷に戀々たりしは何ぞや。

一七 故郷 其の二

立つ所の位置
視る所の眼孔

何をか故郷といふ。其の出産したる地方なるか。其の成長したる地方なるか。其の出産成長したる村落を以て故郷といふか。郡を以て故郷といふか。縣を以て故郷といふか。若しくは更に大なる地方を以て故郷といふか。人の立つ所の位置によりて、視る所の眼孔によりて、故郷も亦一なる能はざるなり。一村落よりすれば、其の三五の近隣は故郷なり。一郡よりすれば、其の一村落は故郷なり。一縣よりすれば、其の一郡は故郷なり。一地方よりすれば、其の一縣は故郷なり。一國よりすれば、其の一地方は故郷なり。世界よりすれば、一國は故郷なり。宇宙よりすれば、總べて吾人人類の棲息する地球

剗刻

は故郷なり。然れども、是未だ以て故郷の眞意を説明するに足らず。故郷は必ずしも客觀的の土地に非ず。唯其の人の心に忘れんと欲して忘るゝ能はざる最初の感觸の剗刻せられたる處、之を故郷といふのみ。古人の詩に曰く、

(一)唐の詩人賈島の詩。唐詩選に出づ。

客舍并州已十霜。 歸心日夜憶咸陽。

無端更渡桑乾水。 却望并州是故郷。

と。此の時に於て并州却つて故郷の感あるなり。然れども愛郷の念最も深きは、最も神聖なる聯想の之に伴ふ所に在り。只是一片の青山のみ。然れども吾人父祖の骨を埋めたる處と思へば、風に臨んで涙流るゝなり。只是茫茫たる原野のみ。然れども吾人の先祖が忠義の爲に千兵萬馬の間を驟馳し、其の碧血を野草に染めなせる處と思へば、懷舊の感勃々

驟馳

Inspiration.

として來るなり。只是一株の栗樹のみ。然れども吾人が少年の時に其の兄弟姉妹と其の下に戯れ遊びたるを思へば、恰も昔日の我、昔日の兄弟姉妹、昔日の我が家の境遇、恍然として眼前に浮ぶなり。人の故郷を愛するは、必ずしも山水の絶佳なるが爲に非ず。露西亞人は白熊と同居するも、故郷を以て最愛の境土と做すなり。倫敦人は其の混々たる怪霧を以て、却つて誇るべしと做すなり。故郷は一種のインスピレーションなり。思うて故郷に到れば、無言の青山は猶是千萬丈の記念碑の如く、茫茫たる原野も猶是舊時の血歴史かと思はる。一木一草の微と雖も尙千絲萬縷の情こまやかにして、傍人の得て知る所にあらず。かくの如き所以のものは何ぞや。

千絲萬縷

垣柵中を奔
る
閃電管なら
す

身世遭遇

人は過去、現在、未來の三世に住す。三世中最も短きは現在なり。最も明白なるは過去なり。最も測り知るべからざるは未來なり。吾は一なれども、時に由りて異なるなり。過去の吾は現在の吾に非ず。現在の吾は未來の吾に非ず。何が故に現在には最も短しとするか。一秒時間前は過去なり。一秒時間後は未來なり。然らば現在の吾とは只一秒時間の吾に非ずや。恰も垣柵中を奔る馬の如く、後蹄は既に過去の領分たらんとし、前蹄は將に未來の領分たらんとす。現在の吾は閃電管ならざる寸刻に在るのみ。故に人一生の間、其の過半は過去と未來との爲に支配せらる。而してかの故郷なるものは過去の標幟にして、千回萬轉思うて過去に到れば、遂に故郷に歸着せずんば休まざるなり。身世遭遇、幾多の快樂ありしか。

幾多の苦痛ありしか。又幾百の戦争を経たりしか。すべて是等の事を回想し來らば、歸着する所は故郷に在るなり。老杜の所謂、魂招不來歸故郷。とは此の事なり。

(1) Byron
西曆一七八
八—一八二
四

(2) 支那金の詩人
元遺山の名は
好問。宋の名は
祐五。卒の實は
一八五〇—一九
一七

泛々

故郷は即ち過去の記憶と追想とを以て建立したる神聖なる殿堂なり。東流の水の海に注ぐが如く、人の想念は此の殿堂に向つて注ぐなり。英國の詞宗 Байロン⁽¹⁾の如き、郷國に容れられず、憤慨の餘、郷國に向つて最後の告別をなして曰く、余は巖根より漂ひたる葦の如く、波瀾の湧く所、風濤の呼吸する所、泛々として行く所に任すべし。と。然れども彼亦曰く、余は異郷の灰となるも、余の魂は尙故郷を愛するなり。と。遺山曰く、眼中正有家山在。一片傷心畫不成。既に故郷と交を絶ちたる Байロンにして此の如し。これを思へば、かの大人、

風雲の氣
兒女の情
多血多涙

君子、英雄、豪傑が故郷に戀々たるも、亦決して怪しむに足らず。風雲の氣、兒女の情、豈必ずしも相衝突するものならんや。否、彼等は最も多血多涙の熱腸あるにあらずや。身を先帝に致し、五丈原頭師を出すの日も、孔明は尙南陽の舊草廬を忘るゝ能はざりしにあらずや。

游子

語に曰く、游子故郷を悲しむと、悲しむは愛するの至なり。彼何が故に悲しむか。游子なるを以てなり。故郷に遠ざからざれば故郷の樂しきを覺えざるなり。彼の田夫野郎、足外に出でざる者は故郷の愛すべきを覺らざるなり。若し彼等に於て一度伊勢參宮を爲せば、其の晝は見るもの聞くもの珍奇の感をなし、更に望郷の情を發せざるも、旅宵人靜なる後、孤燈漸く滅し、惡臥狼藉、鼾聲轟々たるの時に於て、頭は木枕

鼾聲

綠秧
耦耕

の上にて在り、體は煎餅蒲團の上にて在るも、心は故郷に歸りて、夢は既に綠秧深き處耦耕を爲し居るなり。知るべし、最も故郷を愛するの情に富みたる者は、萬里遠征到る處殖民を作す所の英國人にあらずれば、支那人なるを看よ、颯然家を棄てて唯利是圖る英人も、一たびブル・ブリッタニアの歌を聽けば、メスメリズムを施されたるが如く、悚然として佇立するにあらずや。支那人の如きは最も出稼を爲す人民にして最も故郷を愛する人民なり。彼等は出稼す。然れども其の獲たる金を携へて遂に故郷に歸るなり。蓋し、家を愛するの念と故郷を愛するの念とは、皆其の本を一にするものなり。而して雜慮の之に沁入せざる時に於ては、明星の如く、精金の如く、水晶の如く、人の想念中に於て最も粹、最も美、最も靈

Rule
Britannia.
Mesmerism.
悚然

沁入

最も高なるものなり。安倍仲麿將に唐より歸らんとし、明州に於て月の海上より出づるを見、歌うて曰く、

天の原ふりさけ見れば春日なる

三笠のやまに出でし月かも

者流

と。千秋の下、一唱三歎、人をして悽然たらしむ。これ豈能因法師者流のよくする所ならんや。げに故郷は一種のインスピレーションなり。琴線一たび之に觸るれば、無限の妙音を發す。

琴線

—— 靜思餘録 ——

一八 羈旅の歌

松が枝に結べる歌

有馬皇子

家にあれば筈に盛る飯を草枕

たびにしあれば椎の葉に盛る

あづまにまかりける時 紀貫之

絲による物ならなくに別れ路の

こゝろ細くもおもほゆるかな

陸奥の白川の關越えけるに

平兼盛

便あらばいかで都へ告げやらん

けふ白川の關はこえぬと

題しらず 讀人しらず

都出でて今日みかの原いづみ川

かはかぜさむし衣かせやま

旅の歌 藤原俊成

あはれなる野島が崎の庵かな

露おく袖に波もかけけり

東の方にまかりけるに 西行法師

年たけてまた越ゆべしと思ひきや

いのちなりけり小夜の中山

旅宿花 平忠度

行暮れて木の下蔭を宿とせば

はなや今宵のあるじならまし

伊豆の海 源實朝

箱根路を我が越えくれば伊豆の海や

おきの小島に波のよる見ゆ

鞆中百首の歌よみけるに菖蒲を

宗良親王

菖蒲ひく今宵ばかりや思ひやる

みやこも草のまくらなるらん

一九 熱帯の海 其の一 島崎藤村

船は印度の南端を過ぎた。時とすると驟雨が印度洋へ来た。それが我々の甲板へ吹込んだ。合奏のやうな海の音も聞えた。雨後は殊に蒸暑い、熱を帯びた白い雲が行く手の空に起つて、そこにあるものは永遠の眞夏かと疑はせた。コロンの近海で見た漁船の影も隠れた。

ふと波の間に一艘の汽船が見えた。我々の甲板から其の汽船を認めたものは、いづれも欄のところに立つて眺めた。

Colombo.

「あゝ、日本の船では無いか。」

と私は自分で自分に言つて見た、其の二本の檣、其の一本の煙筒、我々の乗船に比べると、自ら構造を異にした其の黒い船の形、みな見覺のあるものであつた。

(Marselles.)

私は艦の方の太い綱の積んである甲板の上へ走つて行つた。そこから船を望まうとした。神戸出發以來、我々の船と前後して、⁽¹⁾マルセーユへ向ふ郵船會社の汽船があつたから、

(Ernest
Simon,
佛國郵船の
名)

波間に見えるのも其の船らしく思はれた。貨物を積むことの割合に少くて速力の多く出るエルネスト・シモンは、見る間に其の船に追付いた。遠く離れて來た自分の國を一つの船にして見せてくれるやうな其の形が、宛も繪巻物のやうにして私の眼前にあつた。私は青く光る波を隔て、向ふの

(Singapore.)

甲板に集る人の影までも望むことが出來た。果してそれが同胞であるや否やを見定めることは出來なかつたけれども、私は頻りに自分の帽子を振つて見た。

間もなくエルネスト・シモンは、其の船を遠くうしろに残して進んで行つた。海はまた沙漠のやうな空虚に還つた。鳥一羽、船一艘、何一つ眼に入るものも無かつた。我々の船が新嘉坡を離れた頃は、まだそれ程にも思はなかつたが、いよいよ印度の南端も過ぎ、コロンボも早うしろになつた時、何と無く私も心寂しさを感じて來た。故國の消息が絶えたことも既に二十二日であつた。

船は亞刺比亞の海へ入つて行つた。そこには油を流したやうな海があつた。どろりとした青い波は、幾趣幾様かの渦

と皺と紋とを描いて見せた。白い雲の影が海に映る程の晴れた日で、其の静さは熱帯らしい静さであつた。どうかすると海は蛇のやうな肌の滑さをも見せた。私はまた波間にむれ飛ぶ銀色の飛魚をも見て行つた。未だ曾て望んだ事も無いやうな、夕日に燃える火の海をも見て行つた。

夕風の楽しさに、大船の甲板ではみな思ひくゞに集つて、涼み話を持寄つてゐた。私はもう自分の皮膚の色の異なつて居ることなどをさ程感じないで、皆の涼み話に耳を傾けてゐた。

失禮ですが私はMといふ者です。コロンボから此の船に乗つて参つたものです。」

と其の時私の側へ來て名刺をくれた日本の絹商があつた。

こんな外國人ばかりの中でめづらしい同胞に遭つて、國の言葉で話が出来ようとは全く私も思ひがけないことであつた。

二〇 熱帯の海 其の二

明けても暮れても私が眺めて行つたものは海だ。

日の光は亞刺比亞の海に満ちてゐた。人を避けて私は海を見に行つた。

一切を忘れさせるものは海だ。

躍れ、躍れ。海よ、躍れ。舷に近く白い大きい花輪を見るやうな、また白い花束を見るやうなのは、我々の船から起す波の泡であつた。忽ち其の泡が近い波の上へ擴がつて行つて、星

のやうに散亂れて、やがて痕跡も無く消えて行つた。私は遠く青く光る海のかなたに、無数の魚の群かとも思はれる波の動搖をも認めた。

條理も無く、筋道も無い海。先蹤も無く、標柱も無い海。豊富で、しかも捉へることの出来ないやうな海。何處を出發點とも、何處を結末ともいひ難いやうな海。私の眼に映るものは、たゞ日の光であつた。波の背に反射する影であつた。藍色の波の上に浮きあがつて、やがて消えて行く泡であつた。波と波と相撃つて時々あがる水煙であつた。光と熱と波とは殆ど一つに溶合つて、私は自分のからだまで其の中へ吸はれて行く思をした。

大船の心安さ。私は波打際の砂の上に身を置いてゐるやうな、海から離れた安らかな心持を以て、而も岸にゐては窺ふ事の出来ない海の懷をまのあたりに近く見て行つた。卷きつゝある。開きつゝある。涌きつゝある。起りつゝある。奔りつゝある。放ちつゝある。延びつゝある。狂ひつゝある。亂れつゝある。競ひつゝある。溢れつゝある。醸しつゝある。流れつゝある。上りつゝある。轉びつゝある。陥りつゝある。渦巻きつゝある。波は波の中に滑り入りつゝある。揺れつゝある。震ひつゝある。觸れつゝある。撃合ひつゝある。混り合ひつゝある。眩きつゝある。逆立ちつゝある。連りつゝある。續きつゝある。我と我が身を恣にしつゝある。

長い廊下のやうな甲板から眺めると、少し斜になつた欄の線が、恰も遠い水平線とすれ／＼になつて、或は水平線の

方が高くなつたり、或は欄の線の方が高くなつたりするやうに見えた。どうかすると青い深い海は、其の板の間まで、波の動搖に身を任せてゐた私のすぐ足許まで這上つて來るやうにも見えた。

—海へ—

二二 歌人西行 其の一

藤岡作太郎

冥加

西行何者ぞ。天涯放浪の行脚僧、其の名を一時の名流俊成と等しくし、鎌倉室町の世、抑歌道に於て定家を難せん輩は冥加もあるべからず、罰を蒙るべきことなり。といはれし時、稱讚の聲また定家に譲らず。近世に至つて、定家の價值いたく墜落したれども、山家集の一書はなほ如何なる歌人の机邊をも去らず。西行の名今に嘖々たるは抑、何が故ぞ。

厭離の志

惕然

西行法師、俗名は佐藤義清、鎮守府將軍藤原秀郷が九世の孫なり。代々武を以て家を立て、義清亦勇敢にして弓術をよくす。和歌に堪能なるは蓋し其の天稟なり。鳥羽上皇に仕へて北面の士となり、左兵衛尉に任ぜらる。上皇其の才を愛して登庸せんとす。されど義清は名利を喜ばずして、常に厭離の志あり。其の出家の動機に就いては、或は傳へて曰く、嘗て同族左衛門尉憲康と同行して鳥羽殿より退出し、明日を期して別る。次の朝參朝せんとて、約に従ひて憲康を誘へるに、門の邊に人立騒ぎ、内には泣悲しむ聲聞ゆ。怪しと思ひて尋ぬれば、殿は昨夜頓死し給へり。とて、若き妻、老いたる母の重り伏して歎くに、義清は惕然として遁世の念更に堅し。官を辭して許されざれども、棄恩入無爲は如來の教なりと觀じ、

四歳の女が父の歸れるを喜びて取纏れるを、思ひ切りて縁より下に蹴落し、これこそ愛着の絆を斷つはじめぞと、顧もせで家を遁れ出で、嵯峨に至りて剃髪せり。とかくて名を西行又は圓位といふ。時に保延六年にして、歳正に廿三なりき。西行既に世を遁れて高野に籠り、吉野に隠れ、出でては熊野に參り、伊勢に詣で、鎌倉に下りて右幕下に見參し、進みて奥州に至り、西の方は中國より四國に渡りて大師の靈場を拜み、それより筑紫に遊べり。常にいへらく、桑門に家なし、抖擻して身を終ふべし。と。一箇の笠、一條の杖、草の枕、苔の茵、東西にさすらひ、自然を友とし、悠悠々自適、興至れば則ち和歌を詠ず。高尾の文覺これを惡み、弟子に告げて曰く、遁世の身ならば、一筋に佛道修行の外、他事あるべからず。數寄を立て、

(一)右大將源賴朝。

(二)弘法大師。

桑門
抖擻

悠悠々自適

數寄

此處彼處に嘯きありく條、憎き法師なり。何處にても見あひたらば、頭を打割るべし。と。其の後高尾の法華會に、行脚の僧の參りあひて、花の陰など眺め歩き、坊に來りて一宿を請ふあり。誰ぞ。と問へば、西行と申す者。といふ。文覺手ぐすねを引き、望の叶ひつる體にて、明障子を開けて出づ。暫しまもりて、年頃承り及びたるに、御尋悦び入り候。とて、迎へ入れて饗應に餘念なし。弟子達はいかなる事のいで來んかと手に汗を握りたるに、此の體たらくにて、西行は無事に歸り去りしかば、日頃の仰に違ひたるは。と怪しみ問ふ。文覺答へて、あら、いひがひなの法師どもや。あれは文覺に打たれんずる者の面やうか。文覺をこそ打たんずるものなれ。といへりといふ。西行深く花月を愛し、また釋迦入涅槃と契を等しくせん

手ぐすね

いひがひな

面やう

幽契違はず

ことを思ひて、詠じて曰く、
ねがはくは花のもとにて春死なん
そのきさらぎの望月のころ
晩年洛東雙林寺の邊に草庵を結びて閑居せるが、幽契違はず、建久元年二月十六日七十三歳にして入滅せり。其の和歌を集めたるもの即ち山家集なり。

二三 歌人西行 其の二

憧る

(一)足利氏中世の連歌師。文應二年(一二二一)歿。年八十六

我が國古來詩人多しといへども、深く自然に憧れ、山川を無二の友として、生涯の過半を旅行の中に終へし者前後僅かに三人。西行、宗祇、芭蕉これなり。西行これが先達をなし、宗祇は應仁亂離の折をも厭はず、西行に私淑して其の跡を追

風月に放浪す
雲水に吟嘯す
吟囊を肥す

跼蹐

ひし者、芭蕉は元祿泰平の機に乗じて、また西行、宗祇が行狀を慕ひしものとす。西行は歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人、各其の道に一期を劃せし三家が、いづれもまた風月に放浪し、雲水に吟嘯せしことを思へば、旅行がいかに詩人の吟囊を肥すものなるかを知るべし。
そもく、平安朝の貴紳淑女は、賀茂、桂、二川の流域數里の間を己が世界とし、海も見ぬ天地に跼蹐して足畿外に出でず。一生の経過極めて單調に、感情を刺衝するものなければ、随つて思想の發展もあることなし。見聞する所は東山の花、西山の紅葉、いつも同じ京洛の風物より外を知らざれば、詠ずるところの和歌も變化を見ず。子は父に繼ぎ、孫は祖を承

天真を忘る

け、たゞ同じ詞花言葉を飾るのみにて、累代繼承しゆけば、和歌の思想辭句の上にも、おのづから典型を生じて、天真を忘る。實情を欺き、虚偽に流れ、浮華輕薄、徒らに形式を飾りて、燦爛たる錦囊、其の内容は空しく、滔々として風を成せる時、西行獨り蹶起して、從來蹈襲の典型を簸却し、みづから山水の間に逍遙して、直接に自然が隱微の聲を聞き、感得するところは萬朶の花と咲けり。

簸却

堂奥

親昵して

西行既に古來の典型を捨て、直ちに自然の堂奥に入らんとす。深く山川草木を愛して、之を視る事猶己を視るが如く、親昵して同情の念に堪へざるは固より然るべき事なり。わきて見ん老木は花もあはれなり

いまいくたびか春にあふべき

こゝにまた我が住みうくて浮れなば

松はひとりにならんとすらん

同情は進んで愛着となりぬ。臨終の大事到る時何物か伴なはん。一切の眷屬珍寶みな我と相忤く。かくはかなみて西

相忤く

雨そぐ花橋
に風すぎて山
ほととぎす雲
になくなり
藤原俊成の
詠

あはれなり
わきて見ん老木は花もあはれなり
いまいくたびか春にあふべき

西行筆蹟

行は官祿を捨てたり、妻子を捨てたり、すべて世間を捨てたり。されどゆかしき花よ、月よ。一旦の沈淪に昨日の親友も今日の日仇敵たる時、山色水聲の我に睦ぶこと舊に依り、訪ふ人も無き山里に心永き春秋は尋ぬることを忘れず。此の親切なる自然に對して、其の慰藉に報ゆることを知らざる者は

選を殊にす

冷血無情の人のみ。西行は最も自然の價値を認めたるもの、
随つてこれが愛着の念も遙に群衆と選を殊にしたり。

おのづから花なき年の春もあらば

何につけてか日を送らまし

うちつけにまた來ん秋の今宵まで

月ゆゑ惜しくなる命かな

真如の月

愛着は迷なり。此の雲を去らざれば真如の月は明らか
り難しと雖も、山水もと無心にして人間の如き魔性を有せ
ず。これを以て窓前日夜の友とす。清淡虚無、一心もまた物に
よつて動かされざること山の如く、機に随つて轉ずること
水の如し。來往自在、こゝに疑懼の境も去つて、安心は漸く決
定すべし。

清淡虚無

疑懼の境

今更に春を忘るゝ花もあらし

安く待ちつゝ、今日も暮さん

雲に唯今宵の月をまかせてん

厭ふとてしも霽れぬものゆゑ

斧鑿の痕

西行の歌は企てゝなすものにあらずして、自ら成れるな
り。次に擧ぐる所の歌により、其のいかに自然にして平易に、
斧鑿の痕なきかを見よ。

ながむるに慰む事は無けれども

月を友にてあかすころかな

今よりは昔がたりは心せん

怪しきまでに袖しをれけり

要するに、西行は生れながらの歌よみにして、歌を作るも

のにあらず。天籟吹來つて松濤乃ち鳴る。其の聲必ず自然を離れず、平易率直を旨とすれども、風凄じければ鳴ることも亦強し。時に婉曲の響あれども、故らに人爲の巧を加へねば、天成の詩美は千歳の下愈、光を増して、後人をして渴仰止まざらしむるなり。

—國文學全史—

二三 醒睡笑

大名のもとに客あり。ふるまひに湯漬出でたり。其の席へ又客あり。それにも膳を据ゑたり。又客來あり。膳を出せとあれども、つひに出しかぬる時、物まかなふ者を呼出し、何とて手間もいらぬ事の遅きや。湯を得わかさぬか。としからるゝ時、手を束ねて、湯はござるが、づけが御座ない。と申したるにぞ、どつと笑になりける。

家主飯を食ふ處へ、常に寄合ふ人來りぬ。なにと、飯ははや過ぎたるか。と問ふに、いまだし。あらおたのしみや。とてかまはず。又人來る時、飯は食はれぬか。と問ふ。はや過ぎたり。といふ。あらお氣やすさや。

一人は寒山、一人は拾得と各名をいうて出る狂言あり。然るに二人連立ちたる先の者、是は寒山拾得と申す者にて候。と名乗りしかば、次の者、言はんこと無かりしに、我等も其の連にて候。

神妙にも無き人集り居ける中に、一人いふ、其方たちの中に、雷の鮓を食うた人があるか。いや無し。さうあらう。稀なものぢや程に。してそちは食うたか。なか／＼食うた。味は甘い

神妙にも無
き人

か、酸いか。」と問ふに、「ちと雲臭かつた。」

何とて芍薬をば歌に詠みたる無きぞと、不審する者あれば、それこそ詠みたる歌あれ。

難波津に芍薬の花冬ごもり

今をはるべと芍薬のはな。

けしからず物ごとくに祝ふ者ありて、與三郎といふ中間に、大晦日の晚いひ教へけるは、今宵は常より疾く宿に歸り休み、明日は早く起きて來り門を叩け。内より「たそや。」といふ時、『福の神にて候。』と答へよ。即ち戸を明けて呼入れん。と懇に言ひふくめて後、亭主は心にかけて、鶏の鳴くと同じやうに起きて、門に待ち居けり。案の如く戸をたたく。たそく。と問ふ。いや與三郎。と答ふる無興さ。しぶく。に門をあけてより、そこ

無興

仰天す

もと火を點し、若水を汲み、爛をすうれども、亭主顔の様悪しくて、更に物いはず。中間不思議に思ひ、つくつく。思案し見れど、宵に教へられし福の神を打忘れ、やうく酒を飲む頃に思ひ出して仰天し、膳をあげ、座敷を立ち様に、さらば福の神で御座ある。お暇申し參らす。といひたり。醒睡笑

二四 泰山に登る

澁川玄耳

泰山に登つて、予はつくつく。支那の舊國であることを今更ながら感じた。麓から絶頂まで四十里、石疊と石段とで築いた幅二間以上の大道が開かれてある。而もそれが治亂興亡定まりなき支那に於て、二十朝數千年を経て、儼然として維持されて居るといふに至つては、一つの奇蹟と謂はねば

(一)支那五岳の
一。山東省泰
安府の北に在
り。

奇蹟

ならぬ。山は泰山より大なるは莫く、史も泰山より古きは莫し。と謂はれてゐる。

支那の古文明は今の河南省を中心とせる黄河流域に開け、周、秦、漢を経て、一は淮水(一)に沿うて東海に、一は漢水(二)を下つて南揚子江流域に普及せられた。周代以前に於ける歴代の帝都を考ふれば、其の勢力範囲は略想像せられるが、大略に言へば、洛陽を中心として、四方へ各千里位のものである。此の河洛平原は、東南に開けた廣漠たる沃野で、漢民族は繁殖するに随ひ、漸次其の方面へ發展したのである。而して其の東方の行手を遮るものは泰山であつた。洪水が來れば滔々として際涯なく、千里の林野悉く魚龍の棲居となる。こんな低窪な廣原の地平線上に、巍峨として聳えたのが即ち泰山

魚龍の棲居

(一) 河南省に發し、安徽省を貫流し、江蘇省に入りて、淮河に注ぐ。
(二) 陝西省に發し、湖北省を貫流し、漢口に至りて、揚子江に注ぐ。

である。日本で例へれば、武州、野州の平原から筑波山を望む様なもので、さして高いといふではないが、附近の關係からして、如何にも目立つて、高くも尊くも思はれるのである。

泰山の高さは其の絶頂が一千五百八十米で、富士山(一)の半ばにも及ばぬ。纔かに阿蘇霧島(二)などと似たものである。併しながら、五千年來支那文明に關する數多の事蹟が、此の山に關聯して、一代は一代より愈々名高いものにしてしまつた。予は本年の夏に一度登山して、非常な興味を感じ、更に種々の準備を整へて、仲秋を以て再び登山し、併せて其の附近の古蹟を訪ひなどして、二週間餘を費したが、到底半月や一月で十分の探査など出来るものではない。

孔子泰山に登つて天下を小なりとす。といふことが傳は

(一) 三三九米。

(二) 一二二五米。
(三) 一五四四米。

(四) 孟子、盡心章句上。

周遊彷徨

つてゐる。富士でも、筑波でも登臨の觀は何處でも同様で、平將門が比叡山より平安城を瞰下して、非望を起したといふのも、亦つまり同一の感じから來たのである。泰山の頂上の眺望は、先づ東北一帯は山脈が連亘して、富士から甲信地方を見るのと、略同じである。西と南は黄河及び淮河の流域たる大平原で、孔子が一生を費して周遊彷徨した齊、魯、宋、陳、蔡の野は眼下に展開して、其の間に汶水、泗水、沂水及び黄河の流が、帯の如く、繩の如く纏れ合つて、數多の大湖、小湖が鏡の如く光つて居る。處々の城邑、籬落が其の間に點々として居る様を見、彼の中に權力を競ひ、境界を争ひ、智に誇り、愚を罵り、怨みつ、泣きつして居るかと思へば、何人と雖も人世のばかばかしさを感じて、ちよつと仙人氣味にならざるを得ない。

籬落

仙人氣味

いのである。同時に又猛然として將門流の野心が勃發して來る人もあるのであらう。

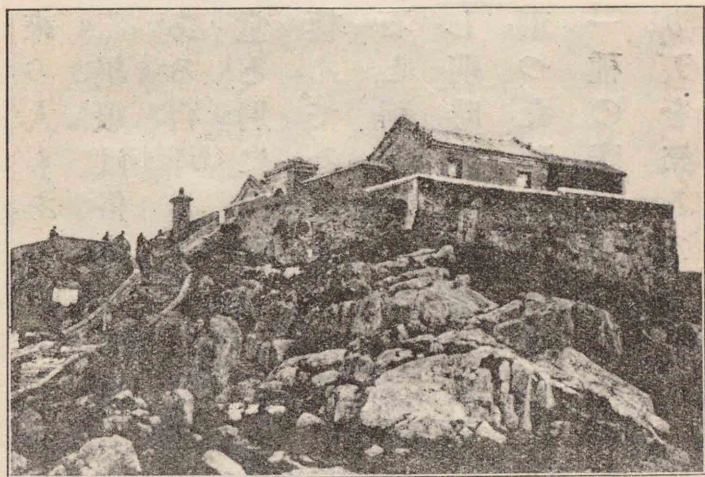
道士

絶頂は俗に玉皇頂と稱せられる。玉皇の廟があるからである。百坪足らずの平地に塀を繞らして、其の内に玉皇の本堂と、別に四棟の小さい建物がある。二三の道士や、雜役者が棲んでゐる。本堂の前に石欄で圍つた大塊石がある。之を巔石と稱し、底つ岩根に通ずる神聖なものと尊崇してゐる。併し明時代に掘露したものだといふ。本堂の傍に「古登封臺」と刻つた碑がある。封禪といふことは支那の古俗で、主權者の一種の廣告である。此の泰山の上に土を築き上げて壇を作り、天を祭るのを封といひ、泰山の麓の小山に土をならして地を祭るのを禪といふ。此は王者でなくては出來ない祭祀

王者

覇を稱す

の禮である。何時の代に、如何なる理由で始つたものかは分



泰山頂上

たのが、無懷氏、伏羲、神農、炎帝、黃帝、顓頊、帝嚳、堯、舜、禹、湯、周の成

らないが、ともかく古い習慣で、
周末に齊の桓公が今の山東省
を根據として威を四方に張り、
天下の諸侯を會して覇を稱し
た時、此の封禪を行つて尊嚴を
示さうとした。勿論泰山は齊の
領分に在つた。しかるに、宰相の
管仲は之に反對して、天命を受
けた帝王でなければ、封禪は出
來ないと言つて、古の例を擧げ

王の十二である。孔子が泰山に登つて、姓を易へて王たるも
のを觀たのに、其の蹟の數へられるのが七十餘で、其の外數
へ得られぬのが萬以上もあつたといふ。何時の代にも、廣告
利用者は澤山有つたものと見える。それが今實際を見ると、
泰山の上に封の蹟と見るべきものは何も残つて居ない。此
の絶頂の「古登封臺」と碑のある所も、何等の特徴は無いので
ある。

玉皇廟の門前階段の下に、秦の無字碑といふのが立つて
ゐる。秦の始皇が立てたといふ傳説である。幅が三尺六寸、厚
さ二尺、高さ一丈五尺五寸の大きな石柱で、上に蓋が載せて
ある。堅緻な質である。大抵な石は二三百年も風露に暴され
れば、分解を起して、表面はがさ／＼になつたり、苔が附いた

りするものであるが、此の碑は數千年を経て、尙すべくと滑な肌をして居る。一字も刻つてない。刻つたのが磨滅したのでも無い事は一見して明白である。古來此の碑に就いて臆説區々で、或は、此は碑ではない、其の中に必ず封禪の文書又は金玉の類を藏してあるのだ。といふ者もあつた。餘り疑を惹くので、或時代の地方官が撤去を命じた處が、之を動かさうとすると、驟に風雷が起つたので、怖れて止めてしまつたといふ傳説もある。清代に至つて、顧炎武といふ學者は、史記の文に依つて、此は疑もなく漢の武帝が立てたのである。最初は字を刻る積りであつたが、つい無字のまま、で残つたのだ。と考證し、今では之が定説に爲つて居るが、なほ多少の疑ふべき點はある。とにかく無字碑は泰山絶頂の一怪物である。

(一) 明の遺儒にして清に仕へず。考證學の泰斗たり。(二) 二七三―二三四(四)

― 故郷他郷 ―

ある。

二五 槩を横たへて詩を賦す

(一) 丞相曹操大船一艘を中央に浮べ、帥の字書きたる旗を建てさせ、左右水寨に沿うて弩千張を伏せおき、自ら將臺の上に坐す。時に建安十二年冬十一月十五日なり。天氣快く晴れて、風靜に、浪平かなりければ、船中に酒宴を催し、諸大將を集めけるに、やうやく暮に及びて、東の山の端に皎々たる月さし登りて、其の光白日の如く、一帶の長江素練を曳くかと怪しまる。曹操が近侍の輩皆錦繡の袖を列ね、戈を擔ひ、槍を横たへて數百人排列し、文武の大將階級に依つて盡く集りしかば、曹操心の中勇み喜び、四方の景を望み見るに、名高く聳

(一) 支那三國魏の君主。字は孟德。諡して武帝といふ。

(二) 紀元八六七(神功皇后)年。攝政七年。

素練を曳く

寸眸に集る

(一)揚子江の南方、主として江蘇、浙江兩省の地、三國時代の吳の地なり。
豈患へん
(二)支那三國の一、建業(江蘇省江寧)に都す。

えたる南屏山、月に映じて畫がくが如く、東は柴桑の境を望み、西は夏口の江を極め、南に樊山、北に烏林、四邊の風景悉く寸眸に集りければ、俱に盃を啣んで、諸大將に向つて曰く、我義兵を起してより以來、民の爲に凶惡を除き、誓つて四海を清めんとするに、大半既に平ぎたれども、未だ得ざるものは江南なり。我此の江南富饒の國を保つ事を得ば、國を富まし、兵を強くすべし。今我が手下に百萬の勢あり、諸大將力を盡して忠を致す、豈功業の成らざるを患へん。(二)吳を平ぐる時は天下我に敵する者なし。然らば諸將と俱に富貴を受けて、永く太平を樂しむべし。我今夜の言を違へじ。諸大將も皆心に記して忘るゝこと勿れ。といひければ、諸大將謝して曰く、願はくは早く吳を平げて、凱歌を唱へ、君の恩澤を蒙らん。と。

(一)共に吳王孫權の謀將。

心腹の患
(三)曹操の將軍。

(四)三國の一なる蜀の主劉備。
(五)劉の軍師。諸葛孔明。
螻蟻の力

酒宴既に夜半に及びければ、曹操遙に江南を指して曰く、周瑜魯肅(一)天の時を知らず、幸に我に心を寄する者ありて、窃に彼が心腹の患をなす。されば天我を助くるなり。(二)荀攸諫めて曰く、丞相輕々しく宣ふこと勿れ。萬一外に洩るゝ時は、大事必ず敗る可し。曹操笑うて曰く、我今此の座の人を見るに、皆股肱の近臣なり。何事か外に洩るゝことあらん。とて、又夏口の方を指さし、(四)玄德、孔明皆己が螻蟻の力を料らずして、我が泰山の重きを動かさんとするがをかし。と打笑ひ、又諸將に向つて曰く、我今年五十四歳、もし吳の國を平げて銅雀臺を漳水のほとりに造り、其處に老後の樂みをなすを得ば、我が願即ち足らん。とて、大いに笑うてやまざりけるに、忽ち鴉の聲南へ飛んで聞えしかば、左右の者に向つて問うて曰く、

(一)後漢靈帝の世妖賊張角内亂を起す。其の徒皆黃巾を着く。(八四四年)

(二)曹操と同時の梟雄。建安三年(八五八)曹操に殺さる。(三)後漢末の豪傑。建安四年亡ぶ。(四)前者の兄。建安七年亡ぶ。

(五)古代支那にて酒を作りし人の名。轉じて

「此の鴉、夜中何の故にか鳴く。答へて曰く、月の明るきを見て夜の明けたるかと怪しむが故に、樹を離れて鳴き候。曹操又大いに笑ひ、槊を執つて船の首に立出で、酒を灑いで江を奠り、又飲むこと三杯にして、槊を横たへて、諸將に曰ひけるは、我此の槊を以て黃巾の賊を破り、呂布を擒にし、袁術を滅し、袁紹を平げ、深く塞北に入つて遼東を定め、天下の内に縦横す。誠に大丈夫の志なり。況や今此の景に對して、甚だ慷慨の心あり。吾自ら歌を作らん。汝等之に和せよ。」とて、歌うて曰く、

對酒當歌 人生幾何 譬如朝露
去日苦多 慨當以慷 幽思難忘
何以解憂 惟有杜康 青青子衿
悠悠我心 但爲君故 沈吟至今

(一)支那上世の名相。周文王の相子。成王を相むけて國基を定む。

呦々鹿鳴 食野之苹 我有嘉賓
鼓瑟吹笙 明々如月 何時可掇
憂從中來 不可斷絕 越陌度阡
枉用相存 契濶談讌 心念舊恩
月明星稀 烏鵲南飛 遶樹三匝
無枝可依 山不厭高 水不厭深
周公吐哺 天下歸心

——通俗三國志——

二六 西郷隆盛論

尾崎行雄

有史以來時を閱する幾千載、所謂英雄豪傑なる者も亦多し。或は名言徳行を以て勝り、或は鴻業偉勳を以て勝る。而し

後昆

て皆能く多少の聲望を當世に繋ぎ、渴仰を後昆に得ざるは無し。而して其の聲望渴仰の深淺、大小を較するに、亦多く言行事業の大小深淺に伴ふものあるが如し。獨り吾が西郷南洲に至つては、古來の英豪と全く選を殊にし、徳望の隆洽なること、遠く其の言行事業の上に出づるを見る。

隆洽

左思右考

南洲の言行欽す可からざるに非ず、事業慕ふ可からざるにあらず。但其の言行事業は、未だ彼が如き徳望を博するに値せざるを思ふ。我此の疑問を懐いて左思右考するもの多し。遂に獲る所無し、窃に以て憾となす。然るに偶然の感興は、一朝にして倏ち多年の疑問を氷解せり。

曾て東京市立養育院を巡視す。収容する所は皆是貧苦にして自立すること能はざる者に係るといへども、熟其の狀

果然

貌を視るに、富貴の相を具へて、爾く貧困なるべからざるもの間々之あり。之を當局者に諮るに、果然彼等の中には高等官の職に在りし者あり。巨萬の富を擁せし者あり。然るに不期の變に遇ふに方りて、直ちに養育院中の人となるは、榮枯の變化亦激しからずや。此の輩獨り豈艱難相濟ひ、變災相弔する親族故舊無からんや。是に於てか思へらく、墮落此の極に及ぶものは、其の身に固有の性癖ありて、自ら不幸を招致するにあらざる無きを得んや。と。乃ち卒然として當局者に問うて曰く、入院者中の一般に通ずる特質なるもの無からんや。若しこれあらば、願はくは與り聞くを得ん。と。

性癖招致

與り聞く

余は卒然として疑問を發したりといへども、翻つて又思へらく、是蓋し深慮を要すべき大問題なり。當局者の經驗に

豊かなるを以てするも、或は直ちに答へ難からん」と。而も當局者は聲に應じて對へて曰く、「然り、洵にこれあり。他人に對して同情を缺き、毫も自ら抑制すること能はざるもの、即ち一般に通ずる性癖なり」と。余は其の應答の甚だ速なるに驚くと共に、一種の感興は油然而として湧けり。而して之と同時に、回憶したるものを西郷南洲とす。

白眼

同情の交換
影の形に隨ふ

身は社會の高位に在るも、家に巨萬の富を擁するも、苟も他に對して同情を缺き、獻身の熱誠無くんば、他人亦白眼を以て我を視る。一朝蹉跌に遭ひて凍餓するも、亦顧る者無き所以なり。畢竟社會は同情の交換を以て成る。知るべし、善惡の因、慶殃の果、應報の違はざることを影の形に隨ふが如きものあるを。社會は同情の交換を以て成立する所以を解し、同

(一)大久保利通。

(二)木戸孝允。

(三)伊藤博文、大隈重信。

衆星北斗に拱ふ

怨嗟

(四)明治十年。

情を缺く者の、遂に他の同情を買ふ能はざるを知らば、其の裏面に於て徳望の歸する、亦自ら其の由る所あるを推すべし。而して南洲の面目庶幾はくは始めて髣髴たるを得んか。之を維新の諸豪に觀るに、南洲の果斷明決は甲東(一)に如かず。謀慮周密は松菊(二)に如かず。若しそれ學藝才辯に至つては、藤隈二君に如かざること遠かるべし。而も挺然群を抜き望を負ふこと、猶衆星の北斗に拱ふが如くなりしは何ぞや。征韓の議破れて急流を勇退し、孤馬に鞭うちて帝都を去るも、毫も怨嗟の風無く、悠々たる覺城の天、犬を逐ひ、兔を獵して閑適自ら遣る。此の間誰か叛心を藏すといふや。若し眞に叛せんと欲せば、前に前原の變あり、江藤の亂あり。丁丑(四)の歳を待たずして乗すべきの好機に乏しからず。況や重望彼

好機方策

が如きを以てして、干戈の外に施すべきの好機方策無しといはんや。今に及ぶまで、彼が叛跡を云々するは、未だ以て英雄の心事を解する者にあらず。

行路の人に
忍びず

彼固より行路の人に忍びざる情あり。況や多年艱苦を共にし、水火に出入し、愛子、兄弟に等しき配下に對するに於てをや。丁丑の死は即ち彼が是等の配下に捧げたる犠牲のみ。世或は月照の死に對して西郷を議する者ありと雖も、我を以て之を見るに、唯其跼天躋地の志士を憐むの情に勝へず、之を救ふの道無きが爲に、自ら亦死を決して共に海に投じたるに過ぎず。漫りに揣摩憶測を逞しうして種々の言議を挾むが如きは、英雄を以て兒女の情無しとするの妄に坐す。恭謙士に下る王莽も、或は以て一時の隆譽を博し得べし。

跼天躋地

揣摩憶測

恭謙士に下る

人心の歸服を得んとして、恩を施し、惠を加へ、強ひて笑を賣る者は世に多し。而も遂に南洲の萬一を庶幾すること能はざるは、多く人工の假作に出でて、性情の自然に基づかざればなり。塗粉は久しからずして剝落す。人工の假作は永く本來の面目を蔽ふ事を得んや。情熾なる時は智力、或は其の作用を鈍らす。一度動いて同情の念に驅らるれば、天下の大事に關する軀を忘れて、一故舊の爲に死を決し、百二都城の子弟に擁せられて、千載叛賊の名に甘んず。大局の打算を誤るを笑ふ勿れ。兒女の情に同じきを嘲る勿れ。南洲の南洲たる所以是に在りて、而して人の偉大なる所以實に是に存す。一々利害を計較し、得失を打算し、自我を立つるに専らならば、他人亦此の如くにして、我に對せん。其の自ら衣食する

人望は同情の反射

匹婦

澆季

能はざるに及んで、直ちに養育院中の人となる、亦怪しむに足らず。己を無みし軀を捐て、他人の爲に同情せば、學問才藝の取るに足るもの無きも、猶能く衆心を得るに足らん。畢竟人望は同情の反射なり。我より注ぐ者を同情といひ、他より返る者を人望といふ。もとこれ一物にして、二あるに非ざるに似たり。匹婦心血を濺げば、丈夫も爲に身を殺すを辭せるに似たり。

人偉大ならんとせば、先づ其の仁心を修養するを要す。他の冷酷を怨み、世の澆季を歎じて、其の極社會の組織を非議する者は、恐らくは自ら省察するを急とすべし。我一日養育院に臨んで、偶然感興を催し、延いて南洲に關する多年の疑問を氷解し得たりと信じ、記して少年子弟研鑽の料に資す。

自讀文

一 我が國の童話

我が國に最も弘く行はるゝ童話は、桃太郎、花咲爺、かち／＼山、猿蟹合戦、舌切雀等なるべし。童話は祖先以來父母より子に、子より孫に、口々に傳承する國民的説話にして、其の起原を尋ねれば頗る古し。神代史に、伊弉諾尊が黄泉國よりの歸路、桃の實を投げつけて鬼を拒ぎ給ふこと見えたり。又少彦名尊が粟莖あむぎにはじかれて、常世の國に渡り給ふこと見えたり。桃太郎の鬼が島に渡りて鬼退治をなすといふこと、此等神代の説話に本づけるなるべし。因幡の白兔が鰐を欺きて皮を剥がれ、海水に浴して更に苦痛を増し、こと、かち／＼山に狸が火傷をなし、膏藥を買ひて更に疼痛いたづらを大ならしむると、其の趣相似たり。白兔の話にては兎惡者なるに、かち／＼山にては、兎却つて手柄

(一)倭寇の船首には、幡大菩薩の船旗を押し立て、進んだ。

(二)種々の面白い話を集めた本。作者不明。

者となれり。然れども鬼が幾度か狸を欺き、遂に之を土舟に溺れしむるまで、其の狡猾なる性質の残りたるもをかし。
童話は口々に傳承せらるゝを以て、時代によりて多少の變化をなし、時代的特調を帯び來る。桃太郎の鬼が島征伐は、其の起因神代の説話に本づくが如くなれども、其の現形を成せるは、足利時代にはあらしかとおもふ。所謂八幡船に乗りて朝鮮支那の邊海に押寄せたる倭寇の侵掠は、桃太郎の遠征談を形成せしめしならんと思はる。かちく山の土舟木舟の詭計といひ、猿蟹合戦の復讐戦といひ、總じて今日まで遺れる童話は、戰國時代の面影を傳ふるもの多し。花咲爺は花の國櫻の國たる日本の童話として最も相應しく、極めて平和的なれども、それすら人悪き爺は殿様に縛られ或は殺さるといふこと、尙封建時代の臭味を帶ぶ。足利時代には、之に似たる説話ありて、花咲爺は之より出でたるが如し。竹藪の中に雀の宿を尋ねたる舌切雀は、腰折雀といひて酷似したる話、鎌倉時代に出來たる宇治拾遺物語に出でたり。
童話は時代の性質をあらはすのみならず、其の中亦自ら國民の性情を發

露す。外國の童話は我のに比して、峻烈慘酷なる話の筋多し。

二 新葉集の歌

大町 桂月

(一)初め出家して尊澄といひ天台の座主であつた。還俗して宗良と改め、中務卿征東將軍として朝敵征討の軍に從はれた。
(二)第九十八代。南朝最後の天子。八一〇—九八〇(二〇五四)

(三)後醍醐天皇の陵。吉野塔尾に在り。延元は天皇治世の年號。

後醍醐天皇の皇子宗良親王、歌に堪能なり。將軍として戰ふ際にも吟詠を廢し給はず。元弘以來弘和元年までの名歌を撰びて、『新葉和歌集』と題しけるに、後龜山天皇之を勅撰に準じ給へり。新葉集はかゝる次第にて出來たれば、隨つて吉野山に關する哀なる歌も少からざるなり。
こゝにても雲井の櫻さきにけり
唯かりそめの宿とおもへど

これ後醍醐天皇の御製なり。吉野の世尊寺に、『雲井の櫻』と稱する櫻あり。雲井は禁中をいふ。さらでだに舊禁中の戀しくして堪へたまはざるに、吉野山中、『雲井』と稱する櫻を御覽じては、豈叡威無量ならざるを得んや。悲しいかな、かりそめの御宿つひの御宿となりて、延元陵畔長へに游人をして涙襟を沾さしむ。

(一)第九十七代。
(二)九八八—
二〇二八

吉野山花も時得て咲きにけり
都の土産とつとに今やかざさん
これ後村上天皇の御製なり。山櫻を土産にして京都に還らせ給ひし時の御嬉しさはさぞと思はるれど、やがて又京都を保ち給ふこと能はずして、再び吉野に還らせ給ひし時の御失望や如何なりけん。

わが宿と頼ますながら吉野山

花に馴れぬる春もいくとせ

花に馴れぬる
花となじみに
なつた。

南風競はず
南朝の氣勢あ
がらず。

(二)第九十九代。
(三)二〇三—
二〇九三
(三)後村上天皇の
女御。

これ後龜山天皇の御製なり。後醍醐天皇の皇孫、後村上天皇の皇子、吉野の山中に人となり給ひけん。父祖の御遺志を嗣ぎ給はんの御志切なれども、南風競はず、終に神器を後小松天皇に授け給へり。されど知らず、京都は果して御心に叶ひたる御宿なりしか。此の天皇の御母を嘉喜門院と申しまつる。其の歌に、

櫻花さきて疾く散る習こそ

我が身の春のもの思なれ

昨日は紅顔今日は白頭、人生の老いやすきは、男子とても悲歎に堪へざるに、まして女性の御身、櫻花の散易きさまを見給ひて、いかに御身をはかなくおぼし給ひけん。

故里は戀しくとてもみ吉野の

花の盛をいか見すてん

これ新葉集の撰者なる宗良親王の歌なり。詩人の雅懐を見る。されど散らば又いかに都のこひしかるらん。

嘉喜門院は歌を善くし給ふのみならず、最も琵琶に長じ給へり。されど後村上天皇崩御の後、悲哀に堪へず、誓つて琵琶を弾き給はざりき。然るに天授三年七月七日、吉野の行宮にて樂を張り給ひけるが樂終りて後、後龜山天皇門院に向ひて、一曲をと切に乞ひ給ひければ、門院も恩愛の情にほだされて琵琶を弾き給ふ。其の時の御製に、

かくてのみ絶えず聞かばやそのかみの

秋おもほゆる峰の松風

むかしは父天皇此の琵琶を聽きて、御心を慰め給ひけん、父天皇今はおはせず、母君の琵琶が亡き父天皇の形見なり。門院の御返しに、

あはれとも君ぞ聽きける今ははや

吹きたえぬべき峯の松風

「わが餘命いくばくもなし。君が昔を忍ぶといふ琵琶の音も、やがて聽き給ふに由なかるべし。」となり。二首いづれも意あはれにして詞も妙なり。宗良親王之を評して、古の勅撰集中の唱和に比して毫も遜色なしとて、之を新葉集に収めたまへり。

—— 作文五十講 ——

三 世界的水路としての瀬戸内海

小西和

Thomas Knox.
George Lake.
米國紐育州ア
デロンダツク
湖の山中に在る
湖。湖岸の風

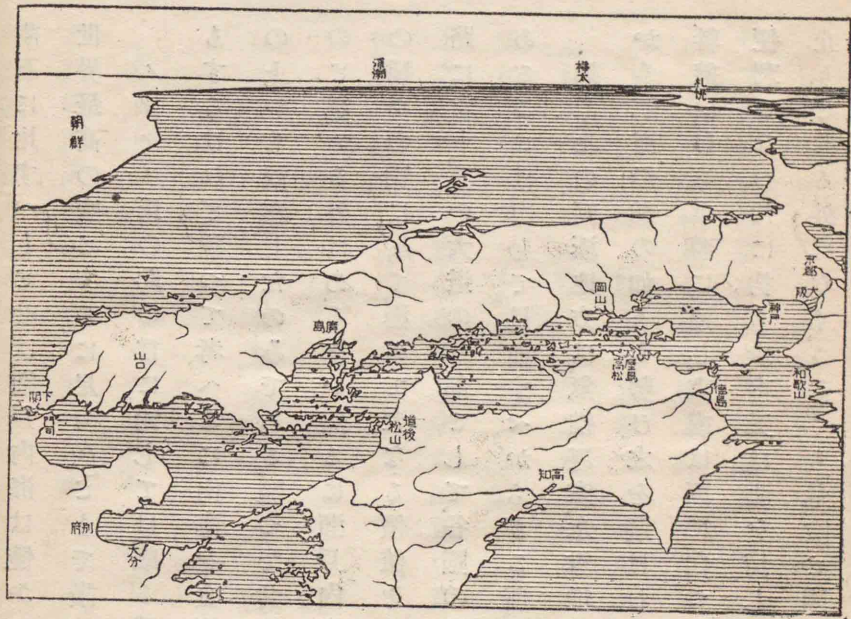
米人トーマス・ノックス氏は嘗て瀬戸内海を遊覽し、我が米國に在りて、殆ど其の廣袤を等しうし、邦人の盛んに之が風光を賞賛する彼のジョージ湖の景趣に勝ること、其の幾層倍なるを知らず。若し此の湖水を以て普通の金

光の明媚な
を以て知ら
る。長さ一
哩三十哩。
幅一哩三
哩乃至四
哩。

剛石に比すべしとせば、瀬戸内海は慥かに磨き上げたる金剛石に値し、優に世界最高の寶とするに足らん。とまで讚美した。

ノックス氏の此の言に對しては、頗る我が意を得たりと謝したい様な氣もするけれど、翻つて考へるに、内海を金剛石に譬へた同氏は、單に之を風景の上から觀察したのみである。随つて其の價值も亦美の一點張で定めたものと認める外はあるまい。然るに瀬戸内海は紫明の風景を外にするも、尙他の種々の點に於て、極めて大なる價值をもつて居り、就中、内海が世界的の水路に當り、其の大道の一部として、各國の交通上に尠からぬ貢獻をなしつつあることは、決して見逃すべからざる所である。

抑、南北の兩極地方は、氣候互寒、氷雪堆積の爲、到底人類の生活に適しないから、航海船舶の如きも、勢ひ之を避けねばならぬ。其の結果、世界の交通路の幹線は、自ら東西に通じ、東或は西に向つて地球を一週することの頗る容易便利となつたに拘らず、南又は北を指して進むが最後、極帯に入つて遂に行止りとなる外はなく、さなくも危険と困難を冒し、且不便と不快を忍ぶこと



瀨戸内海、四小、西和、原、島、海、内、戸、瀨、(るよに圖原氏和四小) 小もある程の海岸に圍まれて居るから、世界の交通は到底海上の運漕を度外視する譯に行かぬといふよりも、寧ろ之を以て其の主なるものと見ねばならぬ。随つて如何に陸上の交通機關が充實しても、之を海上のそれに結び附けなければ、其の効果を完うすることは出来ない。かくて世界の主なる水路は、東

西乃至偏東西に延び、時も最良の船舶が頻繁に此の間を往來しつゝあるに拘らず、南北又と、南北の水路には、一つとして世界的に重要なものがないばかりでなく、之を辿つて居る船舶も、亦概して第三流以下に限られてゐる。即ち東西に互る水路は、世界の大道たる位置を占め、ちやうど市街の本町通に當る理であるけれど、南北のそれに至つては、何れも寂しい横町たるに過ぎず、全く支道といふ格に居るのである。

世界の水路は北半球の温帯を辿るのが普通で、熱帯を經過するのは特殊の場合に限られるが、こは言ふまでもなく、北半球の温帯地方に於て、人口の集中と文化の發達が著しい爲である。

さて瀨戸内海は比較的極めて狹隘な上に、陸地を以て其の四面を繞らし、辛くも外洋に通ずるのみであるが、それにも拘らず多數の船舶が距離も短く、航海も容易な外洋を往來せず、特に針路を迂曲し、殊更に面倒な内海を経由して、之を世界の大道としてゐる所以は、勿論神戸其の他に寄航して、貨客を積卸する爲ではあるが、其の燃料に供すべき筑豊の石炭と、航海に必要な

貨客
貨物や乗客。

清水を得る外、客船に在つては、風光の絶佳な瀬戸内海を通航することを呼物として、乗客を吸収する目的をもつてゐるに相違ない。

しかしながら、若しも内海其のものの形状が悪くならば、到底世界の大道たることが出来なかつたであらう。即ち瀬戸内海は位置の良好に加ふるに、其の形状の適當なのを以てするので、始めて世界的水路の一部を占め得たのであるが、就中左の三件は實に内海の生命ともいふべきものである。

第一に、瀬戸内海は其の幅員が狭いに拘らず、相當の長さを有し、船舶の通航に極めて都合よく出来て居る。而も幅員の狭きに失し、或は礁瀨其の他の障害のある爲、船舶の往來、乃至すれ違に困難を見るときいふ様な場所が極めて尠く、却つて所々に幅の廣い海面を存してゐて、何處までも人工の運河の様に出來て居る。

第二に、瀬戸内海の形が如何によいとしても、若し内海が南北に長いことすれば、横町的と成るから、さ程の價値があるまい。即ち其の東西に長いことが、其の縦貫航路をして世界の大道たらしめた所以である。

(一)由良海峽、關門海峽、早吸海峽の三方口。

(二)National pride. (國自慢)

第三に、形状と方向に缺點がなくとも、若し瀬戸内海が黄海や、黒海や、波斯灣の如く、單に一方口だつたならば、やはり世界的水路と成り得なかつたに相違ない。然るに其の南東、北西、南西の三箇所に廣狹の宜しきに叶うた天然の出入口が都合よく配置され、船舶をして自由に之を通航せしむるのは、元來一方口であつた地中海に、人工の蘇西運河スエズを開鑿かいはくして二方口としたものよりは、よほど善く出来て居る。

海陸の配合、山水の布置はいふも更なり。氣候、草木、魚鳥から人情、風俗に至るまで、一として純美ならざるなく、温帯の圈内に於ける總べての長所を兼有せるものを需めれば、世界中先づ以て、指を我が日本群島に屈せねばならぬ。而もこれは決して誇張的の言や、ナショナル・プライド(二)でなく、一般の航海業者を首め、各國の旅行家が等しく認める所である。されど我が國の北半部は陸の日本ともいふべく、其の山水が聊か粗大を免れ難いので、眞に明媚秀麗な風光、爛雅優美な景趣を以て充されて居る所は、海の日本たる南半部に於て認められる。就中、瀬戸内海方面の一帯は、山水の粹を鍾あつめて悉く之を配

乾坤
大地。

列したかの如き觀があつて、最も秀麗、最も優美の乾坤を形造せるものといはねばならぬ。元來歐洲と東洋の間に於ける水路は、割合に山水の變化が多い箇所に當つて居るから、此の間を往來するものはさまでの無聊を感じない。併し船が地中海を後に見て蘇西の運河を出ると、世界的水路の中で最も炎暑の甚だしむ紅海を辿らねばならぬ。亞典に寄泊したとて、更に賞すべき風物がなく、須臾の上陸を樂しまうにも、劣等な土民が五月蠅く附纏ふといふ始末。それからアラビヤ海を越え、印度洋を過ぎて、新嘉坡に着くまでの長い航海には、時折陸地や島嶼が眺められるけれど、樹は毒々しい程の翠色、花も亦目を眩するばかりの濃色、而も熱帯に於ける植物の特徴として、幹や葉が徒らに長大なばかりだから、殆ど何等の快感をも起すことが出来ないのである。此の景趣に飽きた海員や船客が、まさに瀬戸内海に入らうとするに臨んで、優美の山水に接すれば、宛もモリスンの友禪から眼を御召縮緬に轉する様な感^(一)を起し、愈、内海に入るに及んで、竟に期せずして秀麗な神苑に遊ぶの心地がする^(二)のは理の當然と見るべきであらう。

—瀬戸内海論—

四 棧かきはしの記

正岡子規

本山を出で、櫻澤を過ぐれば、こゝぞ木曾の山口。山のけしき、水の有様はや尋常ならぬに心はあくがれて、桃源遠からすと獨り勇めば、鳥の聲も耳にたちて珍し。

奈良井の茶屋に息ひて、茶莢ちかみはなきか。と問へば、茶莢といふものは知り侍らず。珊瑚實ならば背戸にあり。といふ。山中に珊瑚、さてもいぶかしと裏に廻れば、やはり茶莢なり。あるじの女房親切に採りてくれたり。峽中第一の難處(一)といふ鳥居峠は、若葉の風に夢を薫くはらせて、瘦馬の力に面白う攀ちのぼる。

馬の背や風吹きこぼす椎の花

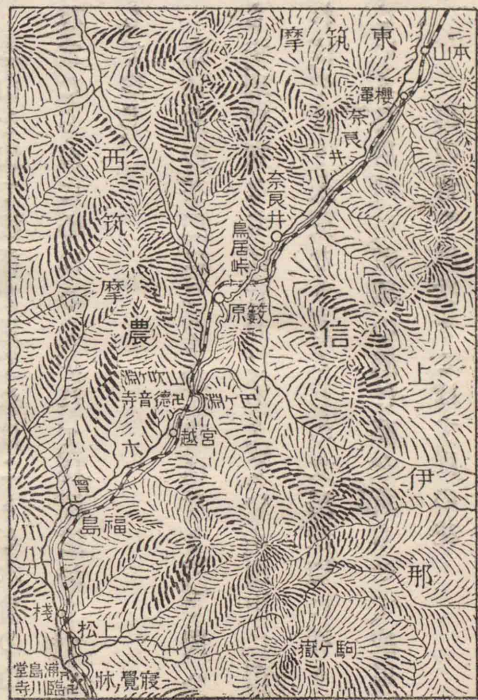
頂にて馬を下り、つくづく四方を見下せば、古木鬱蒼谷深くして、樵夫の小逕微かに隱現す。珍しく晴渡りたる空の青嵐を踏へながら山を下れば、藪原(三)の驛なり。ある家に立寄りてお六櫛を求む。此のほどりよりぞ木曾川に沿う

(一)本山、櫻澤、奈良井は共に信濃國東筑摩郡。

(二)同國西筑摩郡。

(三)西筑摩郡。

て下るなる。白雲をあやぎる山脈は愈、迫りて、かぶせかゝらん勢怖ろしく、奥山の雪を解して、清らかなる水は谷を縫うて、其の響凄じ。深き淵のたゞ中に大きな岩の一つ突出でたる上に、年奮りたる松の枝おもしろく、龍にやならんと思はれたるもをか



し。宮の越の村はづれに佇みて待つこと半時。いと古代めきたる翁の釣竿を擔ぎたるが、畫の中よりぞ現れ出でたる。笠をぬいで慇懃に徳音寺の道を問ふ。翁のいふ、さてもやさしの若

者や。旭將軍のなきあとを弔はんとてやこゝまでは來たまへる。こゝに茂れる夏木立は八幡の御社なり。かしこの山の上こそ昔の城の址なれ。此のわたりの畑も、つは者どもの住みし夢の名残なるものを、今は桑の樹ばかりぞ茂

(一)西筑摩郡。

(二)禪宗の寺。

(三)源義仲。

(一)西筑摩郡。

りたる。と、一つ／＼に指さす。そゝるに古をしのぶ言葉のはし、此の翁謠ならばかき消すやうにうせぬべし。日照山徳音寺に行きて、木曾宣公の碑の石摺を一枚求む。此の前の淵を山吹が淵、巴が淵と名づくとかや。福嶋をこよひの旅枕と定む。木曾第一の繁昌なりとぞ。翌日朝大雨。待てども晴間なし。傘を購ひ來りて書流す句に、折からの木曾の旅路を五月雨

旅亭を出づれば雨小やみになりぬ。此のひまにと急げば、雨の脚に追ひつかれ、樹蔭に憩へば復降りやむ。どにかくと雨になぶられながら、行き行きて棧に着きたり。見る目危き兩岸の岩は、數十丈の高さに剗りなしたるさま、一雙の屏風を押立てたるが如し。神代の昔よりむしかさなりたる苔の美しく、青み渡れるあはひ／＼に、何げなく咲出でたる杜鵑花の麗しき、狩野派の畫にやあらん、土佐畫にやあらん。下を覗けば、五月雨に水嵩増したる川の勢、渦まく波に雲を流して、突きてはわれ、當りては碎くる響、雷の落ちかゝる心地す。うしろの茶屋に入り、床几に腰うちかけて目を瞑ぐに、大地の動しばしは

(一)松尾芭蕉の「棧や命をかからむ馬かづら。」の句を刻した碑。

やまず、蕉翁の石碑を拜みて、さゝやかなる橋の虹の如き上を渡るに、我が身も空中に浮ぶかと疑はれ、足のうらひや／＼と覺えて、強くもえ踏まず、通りこし方を見渡せば、こゝぞ棧の迹とおぼしきも、今は石を積みて固めたれば、固よりゆき來の煩もなく、たゞ葛の力がましく、這ひ纏れるばかりぞ、古の俤なるべき。

(二)上松、寢覺共に西筑摩郡。寢覺山臨川寺といふ。禪宗。

(三)山復山。何工創。成青巖之形。一(和漢朗詠集、大江澄明)

むかしたれ雲のゆききのあとつけて、
上松を過ぐれば、程もなく寢覺の里なり。寺に到りて案内を乞へば、小僧絶壁のきりぎはに立ち、遙の下を指して、こゝは浦島太郎が龍宮より歸りてのちに釣を垂れし迹なり。川のたゞ中に松の生ひたる大岩を寢覺の床岩、其の上の祠を浦島堂とは申すなり。其の傍に押立てたる岩を屏風岩、疊みあげたるを疊岩といふ。象岩は其の鼻長く、獅子岩は其の口廣し。此の外、こしかけ岩、組板岩、釜岩、硯岩、烏帽子岩など申すなり。と、いと殊勝げにぞしやべりける。誠やこゝは天然の庭園にて、松青く水清く、いづこの工匠か削り成せる岩石は

峨々として高く低く水に臨み、凹めるところには渦をなし、逼れるところは灘をなす。いかさま仙人の住處とも覺えていとたふとし。

——頼祭書屋俳話——

五 労働雑詠

島崎藤村

其の一 朝

朝は再びこゝにあり。 朝はわれらと共にあり、
埋れよ眠、行けよ夢、 隠れよさらば小夜嵐、
諸羽うちふる鶏は、 咽喉の笛を吹鳴し、
けふの命の戦鬨の、 よそほひせよと叫ぶかな。
野に出でよ、野に出でよ、 稲の穂は黄にみのりたり、
草鞋とく結へ、鎌も執れ、 風に嘶く馬もやれ。
雲に鞭うつ空の日は、 語らず言はず聲なきも、

雲に鞭うつ 太陽は車を驅つて天空を走るもの、やうに昔から東洋西洋共に信ぜられてゐた。

人を勵ます其の音は、野山に谷にあふれたり。
 流るゝ汗と膩あぶらとの、落つるやいづこかの野邊に、
 名も無き賤しんのもののふを、來りて護まもれ軍神。
 野に出でよ、野に出でよ、稻の穂は黄にみのりたり、
 草鞋とく結へ、鎌も執れ、風に嘶く馬もやれ。
 あゝ綾絹あやぎぬにつゝまれて 爲すよしもなく寝ぬるより、
 薄き襦袢ついではまどふとも、活きて起つこそをかしけれ。
 口には朝の息を吹き、骨には若き血を纏ひ、
 胸に驕慢、手に力、霜葉しもばを履みてとく來れ。
 野に出でよ、野に出でよ、稻の穂は黄にみのりたり、
 草鞋とく結へ、鎌も執れ、風に嘶く馬もやれ。

其の二 晝

たわに
たわむほど
に。

琥珀
黄熟した稻穂
のこと。

誰か知るべき秋の葉の、落ちて樹の根の埋むとき、
 重く聲無き石の下、清水溢れて流るときは。
 誰か知るべき小山田の、稻穂のたわに實のるとき、
 花なく香なき賤の胸、生命いのち踊りて響くとは。
 共に來て蒔き、來て植ゑし 田の面に秋の風落ちて、
 野邊の琥珀こはくを鳴すかな、刈乾せ、刈乾せ、稻の穂を。
 血潮は草に流さねど、力うちふり鋤をうち、
 天の風雨あらしに雷霆いかづちに、わが鬨たたかひの跡やこゝ。
 見よ日は高き青空の、端より端を弓として、
 今し父の矢、母の矢の、光を降らす眞晝中。
 共に來て蒔き、來て植ゑし 田の面に秋の風落ちて、
 野邊の琥珀を鳴すかな、刈乾せ、刈乾せ、稻の穂を。

左手に稻を捉む時、

右手に利鎌を握る時、

胸滿ちくれば火のごとく、

骨と髓との燃ゆる時、

土と塵埃と泥の上に、

汗と膩の落つる時、

緑にまじる黄の莖に、

烈しき息のかゝる時、

共に來て蒔き來て植ゑし

田の面に秋の風落ちて、

野邊の琥珀を鳴すかな、

刈乾せ、刈乾せ、稻の穂を、

其の三 暮

揚げよ勝鬃手を延べて、

稻葉を高くふりかざせ、

日暮れ勞れて道の邊に、

倒るゝ人よどく歸れ、

彩雲や、

落つる日や、

行く道すがら眺むれば、

秋天高き夕まぐれ、

共に蒔き、

共に植ゑ、

共に稻穂を刈乾して、

歌うて歸る今の身に、

ことしの夏を

かへりみすれば、

嗚呼わが魂は、

わなゝきふるふ。

此の日怖をかの日傳へ、

此の夜望をかの夜に繋ぎ、

門に立ち、

野邊に行き、

ある時は風高くして、

青草長き谷の影、

雲に嵐に、稻妻に、

行手も暗く聲を呑み、

ある時は夏寒くして、

山の鳩啼く森の下、

たま〜虹に、夕映に、

末のみのりを祈りきて、

それは逝き、

これは來て、

餓と涙と送りてし

同じ自然の業ながら、

今は思のなぐさめに、

光をはなつ秋の星、

あゝ勇みつゝ踊りつゝ

諸手をうちて笑ひつゝ、

樹下の墓を横ざりて、

家路に通ふ森の道、

眠る聖も盜賊も、

皆土くれの苔一重、

霧立つ空に入相の、

精舎の鐘の響く時、

精舎寺。

あゝ驕慢と歡喜と、
勝ちて歸るの勢に、

力を息に吹入れて、
揚げよ樂しき秋の歌。

— 藤村詩集 —

改訂帝國讀本卷七終

通用字及び正字對照表

(茲に其の主なるもののみを擧ぐ。本
書には主として通用字を用ひたり。)

及	函	凡	凡	滅	涼	準	况	決	冒	口	兔	免	佞	伊	兩	通用正		
刃	函	凡	凡	滅	涼	準	况	決	冒	圓	兔	免	佞	伊	兩	通用正		
回	噴	器	唇	叙	収	雙	廠	廚	卽	卑	勺	効	劔	劔	剪	通用正		
回	噴	器	唇	叙	収	雙	廠	廚	卽	卑	勺	効	劔	劔	剪	通用正		
懺	懃	恒	徃	廻	廩	并	帽	尅	寶	寇	冤	墻	塚	塲	塲	通用正		
懺	懃	恆	往	迴	廩	并	帽	剋	寶	寇	冤	牆	冢	場	場	通用正		
桿	朽	史	晉	昂	旣	整	擣	捏	挿	拔	拿	拘	戲	戲	戟	通用正		
杆	朽	史	晉	昂	旣	整	擣	捏	挿	拔	拏	拘	戲	戲	戟	通用正		
猷	猫	猪	猿	熔	焔	潛	潤	涅	冰	毒	殺	殲	欸	楮	楮	通用正		
猷	貓	豬	猿	鎔	焰	潛	潤	涅	冰	毒	殺	殲	欸	楮	楮	通用正		
穎	稟	碍	砲	盜	蓋	盃	鼓	痴	畧	留	畫	瑣	玄	獵	獵	通用正		
穎	稟	礙	礮	盜	蓋	杯	鼓	癡	略	畱	畫	瑣	玄	獵	獵	通用正		
働	俟	京	亡	並	萬			織	紀	穀	粘	籤	纂	竪	竊	秘	頤	通用正
働	埃	京	亾	並	萬			織	紀	穀	粘	籤	纂	竪	竊	秘	頤	通用正
廝	廁	勅	冲	富	冊	同	膝	膝	腸	脈	胆	聳	耻	羹	群	罰	經	通用正
廝	廁	敕	沖	富	冊	同	膝	膝	腸	脈	膽	聳	恥	羹	羣	罰	經	通用正
妍	妊	野	坂	嚙	叶	表	衛	衛	丑	萌	莽	艷	館	舖	阜	致	臥	通用正
妍	妊	埜	阪	齧	協	表	衛	衛	丑	萌	莽	艷	館	鋪	阜	致	臥	通用正
峯	峩	岳	婚	娉	姊	(もいづれにて)	豹	豹	象	讎	讎	讎	讎	讎	讎	讎	讎	通用正
峰	峨	嶽	婚	聘	姊	(もいづれにて)	豹	豹	象	讎	讎	讎	讎	讎	讎	讎	讎	通用正
微	強	弊	弊	庵	嶋		鎖	鎖	鐵	針	釜	隣	輒	軟	質	贊	賓	通用正
微	強	弊	弊	庵	嶋		鎖	鎖	鐵	針	釜	鄰	輒	輒	質	贊	賓	通用正
村	普	考	慙	慙	忘		鶴	鶴	爵	鬪	麵	馱	隸	隙	隔	隔	間	通用正
邨	普	攷	慙	慙	忘		鶴	鶴	爵	鬪	麩	馱	隸	隙	隔	隔	間	通用正

柿	案	基	棕	楫	稿	概	朴
椀	椀	椀	椀	椀	椀	椀	椀
毘	汙	温	烟	无	无	狸	睹
毗	汚	温	烟	无	无	狸	睹
砧	稿	競	筍	筍	筍	糝	糝
砧	稿	競	筍	筍	筍	糝	糝
網	網	網	網	網	網	網	網
網	網	網	網	網	網	網	網
荒	荒	荒	荒	荒	荒	荒	荒
荒	荒	荒	荒	荒	荒	荒	荒
躑	躑	躑	躑	躑	躑	躑	躑
躑	躑	躑	躑	躑	躑	躑	躑

本來ハ異字ナレドモ同字若シクハ略字トシテ往々混用セラル、モノ。其ノ中
* 標ヲ附シタル文字ニ限り、慣用ニ從ヒテ強ヒテ區別スルニ及バズ。

ワタル。「連互」
桓ニ同シ。
笨ニ同シ。アラシ、麗、粗。
カラダ。

但	但	借	借	借	借	刺	刺	台	台	後	後	商	商
但	但	借	借	借	借	刺	刺	台	台	後	後	商	商
但	但	借	借	借	借	刺	刺	台	台	後	後	商	商
但	但	借	借	借	借	刺	刺	台	台	後	後	商	商
但	但	借	借	借	借	刺	刺	台	台	後	後	商	商
但	但	借	借	借	借	刺	刺	台	台	後	後	商	商
但	但	借	借	借	借	刺	刺	台	台	後	後	商	商
但	但	借	借	借	借	刺	刺	台	台	後	後	商	商
但	但	借	借	借	借	刺	刺	台	台	後	後	商	商
但	但	借	借	借	借	刺	刺	台	台	後	後	商	商

タロシ、タロ。「但馬」
ツタナシ、拙劣。
ミダリガハシ、猥。
身分ヲ越エテオゴル。「僭越」
カブト、兜。「甲冑」
ヨツギ、嫡子。又子孫。「冑裔」
カナフ、叶。
オビヤカス、脅。
サス。「刺殺。刺客。名刺」
モトル、ソムク、詬辰。「亞刺比亞」
星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。「台覽。台臨」
ウテナ、ダイ。
ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、オクル。
キミ。「皇后」
アキナヒ。
モト、本。

壺	壺	托	托	担	擔	改	改	槍	鎗	欠	欠	糸	糸	絲
壺	壺	托	托	担	擔	改	改	槍	鎗	欠	欠	糸	糸	絲
壺	壺	托	托	担	擔	改	改	槍	鎗	欠	欠	糸	糸	絲
壺	壺	托	托	担	擔	改	改	槍	鎗	欠	欠	糸	糸	絲
壺	壺	托	托	担	擔	改	改	槍	鎗	欠	欠	糸	糸	絲
壺	壺	托	托	担	擔	改	改	槍	鎗	欠	欠	糸	糸	絲
壺	壺	托	托	担	擔	改	改	槍	鎗	欠	欠	糸	糸	絲
壺	壺	托	托	担	擔	改	改	槍	鎗	欠	欠	糸	糸	絲
壺	壺	托	托	担	擔	改	改	槍	鎗	欠	欠	糸	糸	絲
壺	壺	托	托	担	擔	改	改	槍	鎗	欠	欠	糸	糸	絲

ツボ。
ミチ、宮中ノミチ。
ツ、シム。
ヒメ。
拓ニ同シ。オス、ヒラク。
ヨル、タノム、ユダヌ、カコツク。
ハラフ。又アグ。
ニナフ、カツグ。
鬼ヲ追フトイフ星ノ神。
アラタム。
ヤリ。
備ニ同シ。鐘ノ聲ノ形容。
アケビ。「欠伸」
カク。「缺席」
ホツイト、細絲。
イト。

羨	羨	虫	虫	詭	詭	詔	詔	證	證	豊	豊	迄	迄	選	選	撰
羨	羨	虫	虫	詭	詭	詔	詔	證	證	豊	豊	迄	迄	選	選	撰
羨	羨	虫	虫	詭	詭	詔	詔	證	證	豊	豊	迄	迄	選	選	撰
羨	羨	虫	虫	詭	詭	詔	詔	證	證	豊	豊	迄	迄	選	選	撰
羨	羨	虫	虫	詭	詭	詔	詔	證	證	豊	豊	迄	迄	選	選	撰
羨	羨	虫	虫	詭	詭	詔	詔	證	證	豊	豊	迄	迄	選	選	撰
羨	羨	虫	虫	詭	詭	詔	詔	證	證	豊	豊	迄	迄	選	選	撰
羨	羨	虫	虫	詭	詭	詔	詔	證	證	豊	豊	迄	迄	選	選	撰
羨	羨	虫	虫	詭	詭	詔	詔	證	證	豊	豊	迄	迄	選	選	撰
羨	羨	虫	虫	詭	詭	詔	詔	證	證	豊	豊	迄	迄	選	選	撰

支那ノ地名。
ウラヤム。
魚介類ノ總稱。又ママシ。
シム。
ラビ、ラブ。「詭狀」
詭ニ同シ。アザムク。
ヘツラフ。
ウタガフ、疑。
アカシ、シルシ。「證明」
イサム、諫。
禮ノ古字。
ユタカ。
ユタカ。
ユク、行。
エラフ。(ヨリトル)
エラフ。(書物ヲ編纂ス)

* 卻 グキ
 シリシク。「退却」
 ヒマ、隙。
 * 鍛 クダ
 キタノ。「鍛錬」
 シコロ、鍛。

宛 字 (左の如き字は假名を使用するをよしとす)

おぼつかなし 覺束なし
 かひ(詮の意) 甲斐
 きつと 屹度
 さすが 流石、道
 しまふ 仕舞ふ
 だけ 丈
 だめ 駄目
 ちやうど 丁度
 ちよつと 一寸、鳥渡
 でたらめ 出鱈目

とうく 到頭
 とかく 兎角、左右
 とて、とても 迎
 とにかく 兎に角
 なかく 中々、却々
 ふるまひ 振舞
 はかなし 果敢なし
 ほんたう 本當
 むだ 無駄
 むづかし 六ケし
 やたら 矢鱈
 やはり 矢張

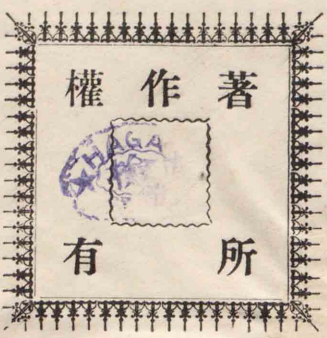
附 録 終

大 大 大 大 大 大
正 正 正 正 正 正

大 大 大 大 大 大
 正 正 正 正 正 正
 七 七 七 七 七 七
 年 年 年 年 年 年
 十 十 十 十 十 十
 二 二 二 二 二 二
 月 月 月 月 月 月
 十 十 十 十 十 十
 四 四 四 四 四 四
 日 日 日 日 日 日
 訂 訂 訂 訂 訂 訂
 正 正 正 正 正 正
 再 再 再 再 再 再
 版 版 版 版 版 版
 發 發 發 發 發 發
 行 行 行 行 行 行

改訂帝國讀本

價 定
卷一、二各金參拾八錢
卷三、四各金參拾六錢
至自卷十五各金參拾錢



發 行 所

東京市神田區
裏神保町九番地

合資會社 富山房

長電話本局一〇三六・本局四一三〇番
振替口座東京〇五一番

著 者 芳 賀 矢 一

發 行 者 兼 合資會社 富山房

代 表 者 合資會社富山房社長 坂本嘉治馬

印 刷 所 合資會社 富山房

東京市京橋區木挽町二丁目十三番地

